

日本生物學會誌

第 26 号



日本生物學會

1988年 3月31日

第 26 号
も く じ

奥野良之助：魚陸に上る(16)	949
水原洋城：猿学万歳(3)	957
本郷支部長：人間生態学への招待(2)	967
生物学詩大事典：Homo sapiens var. todaisotsu	955
書評：シンプソン著奥野良之助訳「ダーウィン入門」	975
編集者への手紙	982
編集局だより	987
編集、してないけど、後記	990

魚 陸 に 上 る (16)

— 魚から人間までの歴史 —

奥 野 良 之 助

第 4 章 無 が く 綱

このところ、“学術論文”やら“編集後記”の投稿が多くて、私の出る幕がなかなか与えられなかった。本号は幸い10ページほどスペースが余ったので、久しぶりに「魚陸に上る」を審こうと思い、どこまで書いたか忘れてしまったので、バックナンバーをひっくり返していたら、何と1986年12月の23号以来、2年間も書いていないではないか。もうタネが付きたのだらう、などと誤解する会員がいるかも知れないので、あえて申し述べておくが、実はこの連載は最後の人間にいたるまで、すべて頭の中でできているのである。あとはそれを紙の上にタイプすれば良いだけなのだが、それには時間がかかる。私のタイプ能力は1ページ30分くらいだから2000ページで1000時間、およそ42日くらいかかる。とてもそんなに時間はとれない。つまり、私は大変忙しいのである。とって、空いた時間がないわけではない。そこは大学教官だから人一倍ある。ただ、空いた時間はすべて温泉へ行ってのんびりすることにしているから、私は常に忙しいのである。

さて、アメリカ合州国の北の方、カナダとの国境に、5大湖という5つの大きな湖がある。そのいちばん東の湖をエリー湖と言って、いずれ後にくわしく話すがクラドセラケというサメの先祖の化石がとれた湖である。5大湖を通して船で荷物をはこび、この地域は工業が栄えた。また北方の湖だからマスが沢山いて、漁業も盛んだった。ついでに、大西洋までつないてしまえばもっと便利になる、というわけで、エリー湖と大西洋をつなぐ運河が掘られた。

ある日のこと、その運河の底をひそかに泳いで、大西洋からエリー湖へと急ぐ、1匹の魚がいた。ウナギのように細長いこの魚の名前は、ペトロミゾン・マリヌスという。日本にはいないから日本名はない。もっとも、その仲間はいて、ヌタウナギという。彼、が彼女かわからないがともかくこの魚は、ある重大な決意を秘めていた。ある重大な任務を与えられていた、といった方が良くかも知れない。本当はどっちでも良いのだが。

その後しばらくして、エリー湖のマス漁師は、ある異変に気づくことになる。網をひいてマスをとるのだが、そのマスは頭と骨と皮しかなく、中身が空っぽになっているのが多かったので

ある。横腹に穴がひとつ空いていて、中で何かうごめいている。空になったマスの袋をふりまわすと、その穴から犯人がころがり出る。それが、本編の主人公、大西洋のヌタウナギことペトロミゾン・マリヌスであった。

今気づいたのだが、この論は論理的ではない。講義や何やでさんざんしゃべったあとで、こんなことというのは気がひけるが、ヌタウナギがマスの横腹を食い破って体の中へ入り、中身をみんな食べてしまったという話なのだが、そのヌタウナギがそのマスの中にすっぽり入っているということは、物質不滅の法則が成り立つ限り、あり得ないではないか。少なくとも、マスの皮がはちきれんばかりにふくらんでいなければならぬ。でも、私の読んだ本にはそんな風には書いてなかった。たいていの本なるものは、かくのごとくいい加減なのである。気がついたらかくのごとくすぐ訂正する、といった著者は、貴重な存在といわなければならない。

さて、ペトロミゾン・マリヌスがマスにかみつきの、遂にはエリー湖、さらには5大湖全部のマス漁業の息の音をとめてしまったことには、深い深い理由がある。あまり深すぎて一言では言えないから、じっくりと説明することにしよう。

このペトロミゾン・マリヌスが属するメクラウナギ類と、もうひとつヤツメウナギ類とをまとめて、円口類という。なぜ円口類というかといえば、口が丸いからである。なぜ丸いかといえば、アゴがないからである。要するに、円口類は無がく綱であった。アゴのない円口類が、なぜマスの横腹に“かみつく”ことができるのか？ 内容はともかく、言葉使いだけは正確をもって旨としている本稿の中では、無尾類（カエル）が交尾するとか、無がく類がかみつくとか、そんな表現は許されない。とはいえ、ヌタウナギがマスの横腹に穴をあけて、中身を内側から食べてしまうのは事実である。

彼らの口は、ちょうどスリ鉢のように丸くへこんでいる。そしてその斜面に鋭い突起がたくさん生えている。これが本物の歯のように固い。ただし、その歯を動かすことはできないので、かみつくわけにはいかない。そこで彼らは、まずさっとマスにとびかかり、まあ水の中だから正確にいうと泳ぎかかり、スリ鉢を吸盤のように使って横腹に吸いつく。次に、身体をくねらせて回転させる。身体が回れば、その先についている口も回らざるをえなくなり、口が回ればそこに生えている“歯”がマスの横腹を傷つけること必定（ヒツジョウと読む）である。身体の回転と共にマスの肉は粉碎され、自動的にのみこまれていく。アゴのない円口類が発明した、回転式自動採食法である。腹いっぱい食べようと思ったら、これでは目が回りそうだから、やはりアゴの方が便利はよい。ところで、いま気がついたのだが、こうして体内に食い入ったヌタウナギが、その中身をすべて食いつくさなければ外へ出てはいけないうわけではない。適当に満足すれば、空けた穴から抜け出せばよいのである。傷ついたマスは息も絶え絶えに、水呼吸の場合も“息”とっていいのかどうか少々疑問はあるが、ともかく水底に横たわる。そこへ第2のヌタウナギが現われて、その穴から勞せずしてめぐりこみ、中身を食べていく。第3、第4、……と無限に続けていけば、たとえ象ほどもあるマスでも、いつかは空サイフとなってしまおうだろう。

やはり、「空になったマスの袋をふりまわすと、その穴から犯人がころがり出る」という表現は間違いでなかった。強いて言えば、出てくるのはヌタウナギだから、犯人ではなく犯魚である。さらにいうと、最近の分類表ではたいがい、無がく綱は“魚”の中に入れていないから、犯無無がく類というのがより正確である。もっとも、私は無がく綱も含めて、魚の形をした4つの綱をまとめて魚形上綱とするローマー大先生の分類を採用しているから、犯魚と言っても差し支えない。

ところで、また今気づいてしまったのだが、ヌタウナギがスリ鉢状の口でマスに吸い着いて体をぐるぐる回転させてすりこんで行く、というのも、よく考えてみると少々理屈に合わない。吸盤というものは、吸い着いたら回らぬし、回せばはなれるからである。シューベルトのピアノ五重奏曲の如く活発なマスが、その機会を逃すはずはない。たちまち泳ぎの下手なヌタウナギをおき去りにして逃げていってしまうだろう。こうして、論理的にはヌタウナギがマスを食うことは不可能になってしまったが、世の中が論理通りに動いていない事は、ちょっとでも世の中したことのある人にとっては自明の理であろう。ともかく、ヌタウナギはマスを食べてしまうのである。

さて、現在地球上に生きているせきつい動物の中で、アゴを持っていないのは、円口類だけである。円口類はメクラウナギ類とヤツメウナギ類の2つに分けられているが、両方合わせてわずか50種しかない。そのうち日本近海に9種いる。少ないようだが、世界の種の2割近くいるのは多い方である。魚全体2万種中、日本にいるのは2千種で10%、両生類2500種中30種くらいで、わずか1%しかない。淡水も含めて陸上にすむ生き物なら、日本にいるのはおよそ1%、海にすむものは10%くらいである。海ではないが、渡りをする鳥も、およそ10%の種が日本でみつまっている。

そんな話ではなかった。この、世にも珍しいアゴのない魚たちは、そろいもそろって、他の魚に襲いかかるのである。日本にいるメクラウナギの仲間も、5大湖のペトロミゾン・マリヌと同じように、他の魚に食い入って、中身をすべて食べてしまう。養殖用のイケスに入れてある魚や、はえ縄に掛かった魚が特に好物らしいが、これは決しておいしいからというのではなく、単に動かないから食いつきやすいということである。シビレエイを食べたという記録もあり、さぞピリピリしておいしかったにちがいない。

一方、ヤツメウナギの方は、もうちょっとおとなしい。やはりスリ鉢状の口で他の魚に吸いつくのだが、ごりごりと食い入るわけではなく、皮膚に少し傷をつけるだけで、血を吸うのである。まあ、吸われた魚は出血多量で死んでしまうのだから同じことだが、空財布にはならない。ヤツメウナギの中には、しかし、吸血鬼にならなかったものもいる。この類の子供は、親と形がちがっていて、アンモセーテス幼生という名がついている。やはり細長い形はしているが、体のしくみは親より高率で、水底の砂や泥の中にもぐりこみ、プランクトンや泥の中の有機物をこし

わけて食べている。体制も食べ方も、せきつい動物の原型に近いから、せきつい動物の先祖はこんなものではなかったか、と言う人もある。この幼生のままで数年をすごし、やがて変態して親となる。ところが、親になったとたん、一切餌を食べず断食するのである。使わないものは退化するというラマルクの法則により、まず消化管が退化して糸みたいになる。ついで歯も小さくなっていく。こうして余ったエネルギーはすべて生殖巣に注ぎこまれ、卵巢もしくは精巢が皮をかぶっているような生き物になりはてる。親になって1年足らず、彼も彼女も卵を生み精子をかけて死んでしまう。というよりも、体の中には卵か精子しかないのだから、それを放出すれば皮しか残らない。いかに体制の簡単な生き物とはいえ、皮だけで生きていくことはできまい。同じアンモセーテス幼生から変態しても、ヤツメウナギは、何も食べない天使への道と、吸血鬼という悪魔への道と、二つに分れて中間はない。これぞ、せきつい動物における“善悪”の起原である。

ここまで書いて、ふと気になって、本を調べてみた。京都大学名誉教授・魚類分類学の泰斗故・松原喜代松大先生の、「動物系統分類学 9 (上) せきつい動物 (Ia) 魚類」(中山書店)という、いかにも権威ある専門書みたいな本である。全く関係はないが、この間テレビを見ていたら、中国の泰山へ登るといっているのをやっていて、とにかく山頂まで石の階段が続いているのにびっくりした。その時仕入れた知識だが、泰斗の泰は泰山の泰で、泰斗の斗は北斗の斗だそうである。いずれも動かざるものの象徴で、学会の権威のことをよく泰斗という。なぜかといえば、権威になると自ら調査したり実験したりはせず、すべて部下や学生にやらせてその上に乗っかっているからである。学会の会長でありながら、自分でタイプたいて印刷するようでは、権威はあってもくあんまりないのちがいますか - 3局長> 泰斗とは言えない。それにしても、泰山・北斗に乗られては、さぞ重いだらうと思うが、最近の学生は仲々辛抱強いと感心する。<金大の泰斗はあまり重くないから、心配無用です - 3局長> さて、その泰斗の書かれた本に、ペトロミゾン・マリヌスは、メクラウナギでなくてヤツメウナギだ、と書いてあった。そうになると、5大湖のマスを手財布にした話が成り立たなくなる。中まで食い入って、中身を全部食べてしまうのはメクラウナギの方で、ヤツメウナギは単に吸血鬼だったからである。ただし、ペトロミゾン・マリヌスは、ヤツメウナギでありながら、少しは肉も食べるらしい。といて、手財布にするほど食べるわけでもない。この話の出典は、「リウ」イニング フィッシュエス オブ サ ワールド」というアメリカで出ている本だが、少々オーバーに書いたのだらうということにしておこう。もっとも、ここでの話の筋からいうと、ペトロミゾン・マリヌスがヤツメウナギであってもメクラウナギであっても、一向にかまわない。

さて、ヤツメウナギはアゴのない魚であり、マスはアゴのある魚である。アゴありがアゴなしに食われた、という事件こそ問題なのである。ここで、時代はいっきにさか上る。

もう忘れてると思うが、古生代のはじめはカンブリア紀であった。いまからおよそ6億年前のこの紀のはじめ、さまざまな海の動物がいっせいに出現した。これを、カンブリア紀における

生命の大爆発という。しかし、かんじんのせきつい動物は、この時代には現れない。といっても、化石が出てないだけだから、本当のところはわからない。せきつい動物がはじめて化石となって残ったのは、その次のオールドウ"イス紀、いまからおよそ5億年前のことである。ただし、ウロコがいくつか出ているだけで、全身の化石はさらにその次のシルリア紀まで待たなければならない。

これらの、魚の形をした、最初のせきつい動物は、いくつかのグループに分かれ、たくさんの種類がいたが、共通してアゴがなかった。つまり無がく類である。アゴがなければさぞ不便だと思うが、彼らはそれでも、オールドウ"イス、シルリア、テウ"オンの各紀、合計1億5千万年もの長い間、大いに栄えた。それは、何しろ地球上初めてのせきつい動物だったものだから、競争相手がいなかったからである。競争相手がいないければ、だれでも頂大へはいれる。いまの東大教授の大学は、まめ京大でも金大でもそうだが、競争相手が少ないころにはいった連中ばかりだから、無がく類のようなものである。≪私らの時には競争はあった。無がく類は私らの先生の時代だー 京大教授> <これから無がく類をほめようと患ってるのに、先走りせんときよー 会長> せちがらい競争にさらされなかったおかげで、彼ら無がく類は、何ともおおらかな生き物であった。見本をお見せしよう。(次ページ) 競争は人を悪くする。競争をはじめて、魚も次第に悪くなっていくのである。

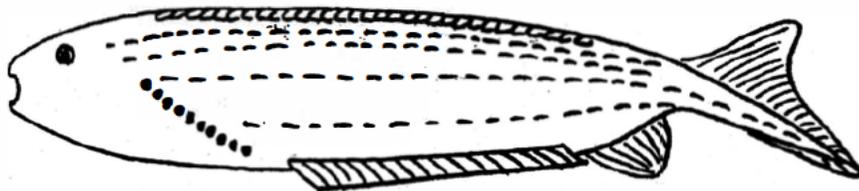
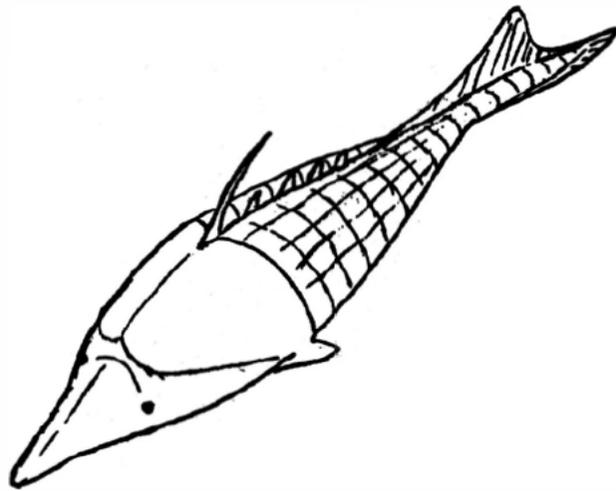
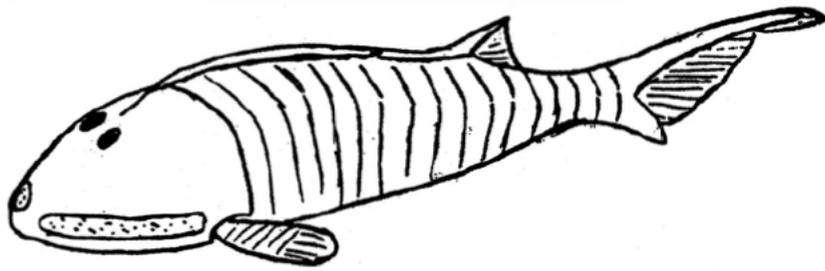
もっとも、無がく類といっても、すべてが善人、善魚かな、であったわけではない。種類が増え数が増えて暮しくなってくると、少しでも他魚よりよい暮らしをしたいという野心をもつ魚が現われる。気に入らぬ魚かいても、アゴのない口ではかみつくこともできぬ。そうだ、アゴをつくってみよう。

無がく魚のいくつかは、さまざまな工夫をこらして、アゴの発明に熱中しはじめた。そして、シルリア紀の間に、その成功者がいくつか現われたのである。たとえどんな不細工なアゴであっても、自分だけアゴをもつことがどれだけ有利かはかり知れない。みんなを黙らせておいて自分だけ好きなことをしゃべれる王様のようなものであろう。<"王様"の代わりに"会長"と書いて欲しかったー 3局長> <好きなことはしゃべっているが、だれも言うこときかんやないかー 会長>

無がく魚でありながら、仲間を裏切ってアゴをもった有がく魚は、当然のことながら数を増やしていく。そして、テウ"オン紀の終り、遂に無がく魚を根たやしにしてしまうのである。

ヤツメワナギとメクラウナギは、この無がく魚の、わずかな区系の子孫である。彼らの中には、修業して恨みを忘れ、仙魚になったものもいたが、多くは吸血鬼となって恨みをばらまいた。大西洋からエリー湖へ運河をさかのぼるペトロミゾン・マリヌスには、かくも深い重大な任務が課せられていたのである。

それにしても、3億年目のかたきうちというのは、ちょっと長すぎるね。(つづく)



甲皮魚類 3 種

上:ケフアラスピス (頭甲類)

中:プテラスピス (翼甲類)

下:プテロレピス (欠甲類)

Homo sapiens var. todaisotsu

赤い門から発覚する、ヒトの一変種。

大学入試の偏差値で、最上位の輪切に入ったヒト幼生が、赤い門から入り、そこでマユをつくり4年以上を過ごす。この変態の期間中に、たっぷりとエリート意識が形成され、出世願望と権力志向が増強される。その環境の影響によって、内在するエリート遺伝子が発現するからである。エリート遺伝子の発現は不可逆的で、死ぬまで消失することはない。

やがて変態が終り、赤い門から飛び立ったこの変種の群れは、日本中のみならず世界中に分散する。しかしその分布は必ずしも一様ではなく、中央官庁、各大学、一流大企業の本社や支社、あるいは海外の各拠点に集中している。なぜなら彼らの志向するところは、官庁では局長<当学会の編集“局長”だけは例外—会長>さらに政治屋、大学では教授さらに学長、一流大企業では重役そして社長と、決まっているからである。彼らは幼生の期間を通して良い子であり、変態後も親の見栄を満たそうとする。

この変種の外見は、モモ(注・参照)に依れば、灰色の服を着て灰色の帽子を被り、灰色の書類カバンを持ち灰色のしゃれた車に乗っているそうである。そしていつも、灰色の小さな葉巻をくわえているそうであるが、しかし彼らの姿は見えても見えないとのことである。この灰色の人が目の前に立っていて見えているのに、モモ以外には見ていると認識することができないからである。しかし彼らがそばに居ると決まってひどい寒気におそわれるそうであるから、人とすれちがって何かぞっとしたら、それはこの変種の1人なのかも知れない。

しかし、彼らの書いた文章は読んだり聞いたりすることができる。例えば、国会中継で聞く竹下首相の演説は彼らの書いた文章である。それは聞くことができ、理解することもできるが、何もわからない。彼らの書いた首相答弁もまた、りっぱな答であるが、何も答えていない。それは、聞いても聞こえない文章だからである。

彼らは非常にこみ入った事を、ものすごい速さで理解したり計算したりすることができる。例えば数字がものすごくたくさん並んだ数を使って、す早く計算することができる。その数はたくさんの紙に書かれていて、その紙を積み上げると何十センチメートルにもなるそうである。普通の人なら、その一枚の紙の数字を見ただけでも頭が痛くなってしまっただろうに。その積み上げられた紙に書かれた数の計算は、一円の間違ひもなくピッタリと合っている。ただしそれは、だれにも確かめる事ができない。その一番上の紙には「予算」と書かれている。この変種の成人は、多かれ少なかれこのような仕事をしている。

その一万、彼らはだれにでも分かる簡単なことを理解できない。例えばクジラとフタの区別がで

きない。どちらも人間が殺して食べるのだから同じだという。けれども、食べれば食べるほど、クジラはどんどん減り、フタはますます増えるのである。<オレもこの“簡単な事”がわからな
い。いつの間に東大を出たんだろう — 会長>

この変種も生き物であるから、やはり少数の変わり者もいる。赤い門からあまり遠くへ飛べず、ヒマにまかせてしいの実を拾っては、酒を飲んでいるようである。<クリマ、喜べ！ 東大卒に見られたぞ。金大中退なのにおね — 会長><クリマさんは中退じゃないわよ、ちゃんと卒業して
るわよ — 富家><ホントか、中退は“流れ星”やったかな — 会長>

注：「モモ」 ミヒヤエル・エンデ作 大島かおり訳 岩波書店。

注の注：この本については、本誌13号 457ページに紹介記事がある。

?? 訂正とおわび??

生物学辞典の Homo sapiens var. todaisotsu の項で、しいの実を拾う人物に関する記述は
筆者の誤解に基づくものであり、事実と反しますので、削除するようお願いいたします。黒いマジ
ックで、なるべく黒々と塗りつぶすのが最も適当なのではないかと思えます。<そんなことした
ら、裏へしみ出して、裏まで読めんようになるで — 会長> そして、栗間修平氏には、深くお
わび致します。

なお、印刷前に、その部分を削除してくれるように独裁会長に申し入れたのですが、拒否さ
れてしまいました。独裁とは、本当に恐いものです。

<「設立趣意書」に、「受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する」とある
のを知らんのか。訂正しようと思ったら、書き加える以外に道はないのだ。もっとも、栗間氏は
「オレは東大卒と間違えられたぞ」とおちこちで言いふらし、大いに楽しむだろうから、おわび
の必要はない。それにしても、君が一言間違えたために、何と16行も増えてしまった。恐しく
はないが、確かにヘンな学会だね — 会長>

<前号918ページより続く>

猿 そやろ、そやろと思たわ。それでわしがはじめから疑うててんがな。そらな、性的に未成熟な、まあ二歳くらいのオスどうしの馬のりとチンポこすりつけごっこやは、今いうた性的興奮や欲求不満の状況にそっくりで、判断のむつかしい方の例やけど、その他の、お前らが安直に性的や、セクシュアルやいうてる行動のほとんどは、性衝動の結びつける根拠のないもんばかりやで。つまり、お前ら学者は、性衝動に基く性行動と、性器に向けての接触刺激追求行動とを、最初からごちゃませにしてしもてるねん。野外の観察者は、実験室内の生理学的研究まででけへんのやから、せめて、そういう実験室段階での研究が混乱せんように、自分の見たことくらい すじ道立てて整理整頓として、接点を設定じといたらなあかんのとちゃうか。それなしにやたらと学際的研究や、共同研究や、総合研究やいうて騒いでたかて、無責任体制の中の野合的研究になってしまうで。象けの塔どころがバベルの塔やがな。

学 また始まった。いやわかったわかった。そやけどな、そういうことやと、お前の考えでは、性衝動に基いておるとはいえん“性行動”は接触刺激追求の行動の範チウの中に入れとくべきや、ということになるのか。

猿 そうそう。

学 そうすると、性器が本来もってる、接触刺激に対する敏感さ、ちゅう解剖学的特性は、性行動とは全然別のもんや、ていいたいのか。

猿 何をいうてくれるねん。しっかりせえよ。あのがめ、性器に本来異なった敏感さが、性行動の発現のずっと前から、接触刺激追求の諸行動の中に願を出すことがあるさかいに、これを性行動と混同して解釈したらあかん、て、わしはいうてるのやないか。

学 ははあ、そういう意味やったんか。わしはまたお前が あかんほの性器についてやたらとやこしい議論をふっかけるもんやさかい、あれを性器やというたらあかん、快感があってもセックスとは関係ない、ていうてんのかと思たんや。

猿 ちがうちがう。わしは、お前ら学者が陥りがちな汎性説ちゅうか、何でもかんでもセックスやらリビドーやらとむっつけて議論もたがる傾向にクギさしとこ思て話をきり出したんやが

な。それから、お前ら、わりと簡単に“関係ない”ていうけど、世の中で、ほんまに関係ないものごとなんてめったにあらへんねんぞ。“それとこれとは話が別”とか、“同根とはいえん”とか、“分けて考えるべきこと”とか、“独立の事象”とかいう、いい方は、お前らもようするやろけど、これみんな“無関係”というてしもたら間違いやわな。ものごとの関連性を知るのには教養のもとやさかい、念のためいうといたるわ。

学 一々えらそうに、うるさい奴やなあ。わかってるて。ところでな、さいせんの接触刺激追求の行動の範チュウちゅう話な、あの続きやけど、あれどのくらいお前らの日常生活の中で一般的なものや？

猿 現象的にはお前も見て知ってるやろけど、そらもうごくごく日常一般普遍的なものやて。生まれたとたん始まるお母はんへのしがみつき。あかんほ同士のしらべ合い。こどもの遊び仲間同士の間に見られる、多様な型の短時間、長時間の接触。お母はん、あるいはそれ以外の年長者からの幼い個体への接触。この中には子守りも入るわな。おとな同士では毛づくろいのやりとり。それから、そうひんばんではないけれども、馬のり、マウンティングとプレゼンティングやな。全体を通じていえることは、こどもの時から——こどもに多いのは当り前やけど——おとなになってからも、姿形を変えて、個体間の交渉の中で消えることなく、常に、広く見られるものや。そやから、当然、性器がこれと関わってくることかあるわいな。あってもやて、そうかというてお前みたいに、それをただ機械的に性行動の範チュウに放りこんでたんでは、理解は進まん。性衝動に基くという根拠のないものは、性器に対する接触刺激追求の行動ちゅう範チュウにすなおに入れとく。その上で、必要あれば改めて吟味を行なう、というくらいの分別がないとあかんわな。

学 未成熟個体の場合は、未だ性的機能が発現しとらん、というてすむやろけど、一たん成熟した後の個体については、その分別も怪しうなって来るのとちゃうか。

猿 というと、どんな例や。

学 まずおとなのオスどうしのマウンティングの例や。優劣の関係ははっきりしてるねんけど、この場合は交互にプレゼンティングとマウンティングをくり返してたから、強い方からの優位主張が強い動機となつたとはいえんな。詳細ははぶくけど、二匹のそぶりから判断すると、何か外部に二匹共通の不安を呼ぶ原因があつたらしい。そやから、この二匹の間の交互マウンティングは、お互いが原因になって生じたのやない緊張を解消する機能をもつもんやつた、とわしは見てる。ここで目立たんは、二匹のペニスや。上に乗ってる方は、ベルグイック・スラスト、つまり腰の前後律動運動やな、とともにペニスをほっ起伸張させる。これを、ひとマウントごとに、上下入れかわつては、くり返したんや。それ以上、マスターベーションもせんかつたし、もちろん射精に至るようなこともなかつたけど、あきらかにペ

ニスに対する刺激を、二匹は交々行うておったことだけは確かやねん。この連中は、当然おとなとして性行動の経験はあるし、ペニスの“正しい使い方”いうたらおかしいか知らんけど、本来の機能は知っとるわな。となると、こういう、ことのついでみたいなやり方からも、性衝動がたかまらんともいえん。まあ、この時はたまたま非交尾期やったけど、交尾期にかけてこの類いの行動を見ることはある。わしは、これを敢えて同性間の性行動とはいわんけど、そーいいたい人間に対して、それは違うて、といいつらいのもたしかや。

猿 そうか。なるほど。動物の行動見て、これは一体何をしてるねやろな、と考える時は、これは何行動というたらええか、て考えてるわけやからな。せやから性行動というてもええかどうかを判断するには、性行動の範チュウについての一定の規準の設定が必要やわな。ところで、お前ら学者には、行動の範チュウつまりカテゴリーの基準はあるのか。

学 ちゃんとやる奴とやらん奴とおるさかい一概にはいえんけど、ごく常識的にいうたら、性行動の基本は、“発情したメスと成熟したオスとの間で行われる、射精をとまなう交尾行動”にあるといえるやろな。そやけど、それだけですべてが単純に割り切れるわけやないから、これに、“それと関連してあらわれる、不完全、未発達、また付随的な、性衝動に基くと考えられるもろもろの行動”もひつつけとかなあかんやろ。ただ、“性衝動”ちゅう奴のありがた、外から見ただけでははつきりせんよってに難儀することもあるし、他の行動範チュウに入る行動型と、性行動の範チュウに入る行動型とが、互いに重なることもようあって、どっかへ入れといたらすむいうもんやないさかいにややこしいねん。

猿 そら御苦労な話やな。そやけど動物の行動いうもんは、本来ややこしいもんや。範チュウどりちゅうかカテゴリーライゼーションがうまいこといかん、割り切れんちゅうのも、当り前のこっちゃ。とはいうものの、お前のいう、“交尾行動を基本にすえる”ことや“性衝動に基く”という基準のとり方は、原則に忠実な態度やとわしは思うて。

学 お前もそう思うか。それならひとまず安心や。

猿 そやけどな、――。

学 何や、まだ続きがあるのか。

猿 原則に忠実であるとともにやな、それぞれの事実関係にも同時に忠実でなかったらあかん。

学 そら当り前やないか。

猿 当り前や。当り前やけどな、連中が何をしてよるのか、というて思案するときが大事なんや。お前、さいせん、同性間の性行動やていいたい奴に対して、そやない、ていづらい、いうたやろ。そこやねん。わしはその時簡単に“そらそうやろ”とはいうたが、ほんまは、それぐらいのことがいづらいようでは困りまんねんで。さいせんの例てはな、この交互のマウンティングは、一、同性間の性行動やいう説、二、優位の誇示やいう説、三、性器もしくは

その周辺部位への刺激追求や、四、緊張状態の解消やという説、の四つの動因のうちの
どれが主に動いて起きなかつたか、お前ら学者やったら考えるとこやろ。そこでや。いつ
かもいうたように、これらをただら列して見たかて考えは違まん。かといふで、一つ一つ、
これはちがう、これも当ではまらん、こうともいい切れん、いうて、消去法で消して行って
どれか一つに決めよと思てもうまいこと行かん。そういう時には、考えられる諸動因が、どの
ように働き合い関り合うて、この行動を成立さしとるか、を吟味する。いうたら構造的に考
えるねんな。四の緊張状態の解消。まずこれから行こか。お前のいう通り、二匹共通の不安
から生じた緊張の解消。こら大いにあり得る。交互にプレゼンティングし合うてんねんから
な。基本はこれやろ。こういうときには、二の優位の誘示あるいは優位性の主張は、心理的
には抑制されてひっこむのがふつうや。ほなら三は？ こら実際に性器への追求をやっとる
さかい、事実として否定はでけん。そやけど、それを主動因、主目的と見るのはどうやろな
あ。おとなのオス同士の場合、大きなおっさんがそれだけのために寄り合うて、いっしょけ
んめになる、なんちゅうことは、こらちよっとわしら考えにくい。餓鬼のころやったら、な
いこともないが、そのころは、あそび仲間関係が、ちゃんと維持されてるさかいに、それを
基盤にして接触刺激追求も出やすいわな。しかもそれは接触刺激追求一般の行動範チユウの
中に入れられるべきもんという方がええやろ。しかし一方で、この例の三はむしろ四とな
じみやすい性質をもってることも事実や。餓鬼のころから、接触刺激追求の行動は、不安や
緊張の解消とよく結びついてるねん。おとなになると、もとの遊び仲間も軟りちりになっ
てよそよそしゅうなつてまうけど、緊張解消のマウンティング行動は、より儀式的になりなが
ら、却ってはっきりした形で残る。そこで、それをやる時に、この例みたいに共通の不安か
ら来る緊張解消の要求が強かったら、昔の餓鬼時代の接触刺激追求要素がそれに重なって出
て来るのは、大いにあり得るこっちゃわな。それに性器に向けての刺激は、心理的にも鎮静
効果がある。そやから、四と三とは、もともと互いに関連し合い、相いまって生じやすい動
因やねん。ひるがえって一はどうか、ちゅうたら、これはもう二、三、四、とちごうで、最
初から現象の概念的解釈に過ぎん即物的説明や。性行動や、同性愛やちゅうことしかいうて
へんし、その根拠は、ちゅうたら、チンポがいきつたさかい、ていうだけの、至極次元の
低い説やから、これは吟味から外してもかまへんやろ。つまり四を基本として、それに
三が結びつき、二が抑えられてる、というふうに理解しとくのが、わじから見ていちばん無
理のない、妥当な扱い、というところやろな。

学 すると、そういう具合に考えるのを、“構造的理解”でお前はいうねんな。

猿 そや。もっとも“構造的”で、わざわざいわんでも、各行動型同士の異同及び相互の関連性
を、動因や要求を想定しつつ吟味し、行動の個体発生過程に照らして、それぞれの行動範チ
ユウの中に位置つけて理解する態度、というてもええ。肝心なのは、より皮相的で概念的な

解釈を批判し排除する能力を常に維持することや。お前みたいにやな、おとなのオスどうしてしかも性器が関わってるさかいに同性間性行動やないか、ていわれたら、それもそうやなめて一も二もなく引き下ろすような学者は……

学 その先いうな。わかったわかった。もうええ。ところでやな。ここまでのところでマウンティングの話がだいぶん具体的に出て来たさかい、これも 自己同一性確立の過程の話やコミュニケーションの話の時みたいに、その個体発達の過程に沿うてちょっとマウンティングの発達の話聞かしてくれ。

猿 お前は、わしがせっかく、学者のあるべき姿やとるべき態度について論じようとしてるのに、すぐごまかしてしまよるな。

学 何が論じるや。わしをののしり倒してるだけやないか。

猿 ののしり倒すてな人間きの悪いこといわんといてくれ。わしはお前に、せひ学者として真人間になって本心に立ち帰ってもらおと思て ——

学 それぞれ、それや。その手には乗らんぞ。ええと、話を本筋にもどしてやな、——

猿 こっちの方も本筋やと思うけどなあ。

学 そっちの筋は、いづれ暇がでけたらゆっくり聞かしてもらいまっさ。今回はとりあえずマウンティングマウンティング —— さて、あかんほから始めよか、それとも逆におとなから始めてもかまへんけど。

猿 お前は、もうだいたいマウンティングのあらましは見て知ってるやろ。どっちからでもわしはかまへん。

学 そうか。そんなら あかんほから、つまり発達の始まりから行こか。いちばん最初というところで、ずばり、あかんほでは、どういふかたちで出る？

押えつけと乗りかかりや。このへんの話は、さいせん、性行動と直結させて解釈したらあかんいふ話の、あかんほのこすりつけのところでいうた通りや。これの働きかけはマウンティングする側からの一方的な行為として出る。ということは、プレゼンティングによって誘われることなく出る、という意味や。つまり、ここでは身体の接触は、快感を報酬として行われてるといってもええやろな。

学 快感か。つまりええ気持ちになることが求められてるねんな。

猿 そうそう。ええ気持ちや。それも皮膚の接触刺激追求そのものもそうやし、ひつつくことでほっとして心が和むちゅうか、心理的に落ち着く効果もある。いうたらプラトニックな喜びやな。

学 おい、まってくれや。ペニスこすりつけといふプラトニックもくそもないやろ。せめて、スキンシップによる安らぎとか何とかいうたらんかい。

猿 それもそうか。要するに、スキンシップでもええわ、ひつつき合うてやな、接触刺激も追求

するし、一方、心の安らぎを得ることもできる。おとなになってからの心理的緊張状態の解消と、接触刺激追求との分離も、ちびの時には未分化の状態にあるちゅうことやわな。それから、おとなになると、こういうことするには、攻撃性をかなり抑制しもってやらんとあかんけど、こども時代は、せいーばい攻撃性を発揮 させたかて、深刻なけんかにはならん。たとえなってもすぐ遊びに解消してまうよってに心配ない。

学 優位の主張と誇示は、どないからんで来るねん。

猿 これは、もともとが攻撃性の発揮と結びついて発達するもんやから、わかりやすい。どっからともなく乗りかかったり、押えつけて、どや、強いやろ、まいったか、ぐらいのとこから、次第に、お前よりわしの方が強いねんぞ、よう憶えとけ、ちゅう、“優劣関係”の認知にうつりかわって行く。ちびのころは、その“関係”もなかなか固定も安定もせんけど、少くとも、その時に負けた奴、負けそうな気になったやつは、自分から、まいった、とか、こうさんや、とか、プレゼンティングをすることで、積極的に相手のマウンティングを誘い、それを支える姿勢をとる、ちゅうことを憶える。つまり“関係”の認知をすることをおぼえるようになるわな。こんな過程が、みんな平行して進行する。未分化の状態から機能分化、行動型分化が次第次第に起きて来るねん。

学 なるほど、そうすると、快感の出かたあり方も、だんだん分化するちゅうことにもなるねんな。ところで、メスのこすりつけの話は、さっきちょっとわしが出したけど、あれはマウンティングには結びつかんのか。あんまり見たことないような気がするねんけどなあ。

猿 ないことはない。そやけど、オスめこどもみたいに、あそびの中でこすりつけ合うたりすることはまあないな。

学 そらまた何でや。

猿 オスとメスの性器のついてる位置よう見てみい。オスは、マウンティングして、相手の尻にチンポ押しつけたら、ちょうどうまいことこすりつけられるようになったあるやろ。おとなの交尾の姿勢とまったくいっしょや。けど、それできっちりうまいこといくねん。おめでたい“汎性説”の連中が喜んで、こどもの性行動や同性愛やいうて、ふれまわってんのがそれやな。メスは、オスにマウントされるねやったら、まぐれでうまいこと接触刺激を受けることもあるやろけど、相手がメスやったら全然意味ない。それから自分がマウントする方になっても、相手のどこにもうまいことこすりつけられへんわな。三才こして、はじめて発情したメスが、オスのこどもをひっぱって来て、マウントさしたりすることもあるけど、こらまあおぼはんかでするこっちゃけど、要するに、メスのこどもが性器に対する接触刺激を求めするには、マウンティングは、どう見ても適当なかたぢやない、ちゅうことやねん。

学 それはわかるけど、接触刺激追求以外でやな、優位誇示とか、攻撃性の発揮と結びつく方はどうやねん。

猿 そっちの方が。活発でおてんばの娘がオスみたいに、なかまにマウントしたがることはあるけど、数は限られるわな。そんな奴は、木ゆすりかてしよるで。もっとも<<ガ・ガ・ガ>>てはえるところまではなかなか行かんわ。やっぱりオスとは迫力がちがうな。“女の腕まくり”ちゅうことばがあるけど、あれはさしづめ“女の木ゆすり”ていうとこやな。

学 オス相手にあそんでてもマウントしよらへんか。

猿 お前、ちびがオスとメスとであそんでるとこ、よう見るか。

学 そういうたら、あんまり見たことないな。一才ぐらいのやつどうしか、姉さんがオスのちび子守りしよるか、ぐらいのどこか。そやな。ほんま見てえへん、いや、見んなあ。

猿 そない強誇せんかて、ちょっとぐらい見てもええねんで。しかし、ふつうは一才過ぎたらオスとメスとは別々にあそんでるやろ。

学 うん、何でやる。

猿 ひとつは、オスのあそびがだんだん荒っぽうなって、メスのこどもには、おもしろいねやろな。もひとつは、メスのこどもはお母はんの近くであそぶことが多いけど、オスはわるさして怒られるし、それもお母はんだけやのうて、そのへんのおぼはんやら恐いおじんやらに怒られることも増えるさかい、だんだんお母はんの傍から離れてあそぶようになる。二才になるころには、オスはもう四、五才の年長の若い衆にあそんでもろたりするようになるし、メスは、あかんぼつかまえて子守りやら喜ぶようになったりして、本式に遠ざかってまうな。

学 メスはあかんぼにマウントしたりせえへんのか。

猿 せんな。オスは、あかんぼつかまえてもマウントしようとして、泣かして、よう親やそのへんのおっさんに怒られてるけど、メスは、抱いてまわる。気持ちのやさしさもあるのかもわからんけど、あかんぼうをうしろからつかまえたときに、四つんばいやと上からかぶさるし、座ったら胸に抱える姿勢になるみたいやな。オスはもうすぐふだんのくせが出て、マウントに行っておしつぶしてまいよる。

学 やっぱだいぶちがうねんな。これが、ただ、ひっついて気持がええちゅう、こどもでもようわかる接触刺激追求から性行動のカテゴリー に入りかける、もしくは範チュウどりが微妙になりのは、どのへんからや。

猿 ひとつは、この前にいうた、二才から四才ぐらいまでのオスどうしのマウンティングあそびやな。これは判断がむづかしい。それ以下のちびはやらんし、若い衆もおとなもやらんさかいな。こんなんは置いとかなしゃあない。明らかに性衝動に基きながら、展開が接触刺激追求の方へ行く、ちゅうのもある。それは、さいせんいうた、はじめて発情した娘とオスのこどもとの間の交渉や。片っぽは本気やけど相手に さっぱりその気がないと、半分あそびになつてまうわな。メスの方も処置ないよって、子守りしてるみたいなかっこで終る。

学 それではせっかく高まった性衝動のおさまりがつかんやろ。何でもっと実際に役に立つおと

なに接近せんのか。

猿 わしかでぞない思うけど、わし自身、嬪時代を経験してないさかい、そのへんの気もちがよ
うわからんねん。あえてぞんたくしたら、まあ、はじめはおっさんらが気色悪うておとろし
いのとちやうやろか。それで卒かっこうも近いオスを物色するねやろけど、そいつらがまだ
戯鬼で、何にも知らん。めぐりめぐって結局は、おっさんか若い衆に出合うてけりがつくわ
けやけどな。

学 四才ぐらいのオスやったら、精子形成もてけてるやろ。それに、こどものときからあそびも
って、優位誇示や接吻刺激追求やらのマウンティングくり返してるねさかい、若いメスがプ
レゼントして来よったら、待ってたほい、てなもんやないのかいな。

猿 それがそうはいかん。そんなとき、正経験の全然ない青二才 —— ほんまは四才やけど ——
は、ひとことていうたらびびるねんな。ふだんメスにマウントすることで、よっぽどませた
やつやないと、まあないわな。おとなの交尾もちびのころからよう見てるけど、それとわが
こととはやっぱりちがう。相手の態度かて妙におしつけがましいし、思いつめたような感じ
でやって来られたら、わしも昔経験あるけど、ちょっと気色悪いもんや。それに、あいつら
ストレートにプレゼンティングしよらへんで。赤い赤い顔して、何やわけのわからん呼び声
やら欲求不満の声出してもって —— 今思たらそれが恋鳴きなんやけど —— 体ふるわしもっ
て、真正面からわっとしがみついて来たりしよるねん。かなんでえ、あれは。思わず赤面す
るで。

学 お前ら赤面で当り前やろ。

猿 あはいえ。四才ぐらいやったら白面のやつかてぎょうさんいてるがな。白セキの貴公子や
て。

学 何が貴公子や。奇し候子やろ。要するに恥しいのか。

猿 サルはあんまり恥しいとは思わんもんやけど、迷うちゅうか惑うちゅうか、つまり迷惑やね
ん。突き放して逃げよと思ても身体が動かへん。どないしてええかわからん。腰浮かしてそ
ろそろ逃げかかると、相手はわしの尻に手かけたままついて来よる。まるで電車ごっこや。

学 ははあ、お前もそんな純情な時があったんやな。今の姿からは想像もつかんけど。

猿 だれでもそんな時はあるわいな。うるわしき惑いの年や。

学 うるわしいだけ余分やろ。それでどないなるねん。

猿 どないもならん。要するにそんな状態の中で、時たまプレゼンティングの姿勢もとるけど、
こっちはもう惑うだけ惑うてもてるさかい、それに応じられへん。なんとなく片付かん気
分のまま別れてまうのが落ちや。それに、後でよう考えてみたら、そんなときは相手のメス
もやっぱりどないしてええかわからんかったみたいやな。そういう意味ではお互いさまちゅう
ところもある。

学 なるほど。あんな決まりきった姿勢で、しかも見たこともやったこともある動作でも、いざとなるとうまいこといかん、ちゅうのはおもしろいなあ。なんとなくわかるような気もするなあ。

猿 ほお、お前もそんな経験あるのか。

学 そんなで、おい、サルといっしょにするな。けったいな目つきせんといてくれ。ええと、お前の今の話やと、惑うてる思春期のオスは、結局、性行動のマウンティングをどなして学習するねん。若いメスには結局縁なしか。

猿 いや、そうばかりでもない。例えばやで、比較的年長の——三〜四才のオスのあそび仲間の中に、たまたまはじめて発情したメスがあそび半分でまぎれこんで来よったりして、そのメスの発情の度合いがあんまり進んでない、つまりあんまり興奮してない、てな状況やったら、わりかし両方が落ち着いた態度で、プレゼンティング-マウンティングのやりとりのでける場合もある。周りでそれをじいとしてたなかまのオスが、それに参加することもあるしな。

学 つまり、比較的冷静で、心にゆとりのある時やったら、すんなりと練習でけるちゅうことか。

猿 そうやな。しかしまあ、その程度のチンピラは、群れ全体の生殖活動には、大した貢献はせんのがふつうや。

学 なるほど。それから、ずっと年長のメスにつかまって性行動のマウンティングを学習する機会はあるのか。

猿 それはあるな。若いメスに比べたら、おぼはんらは、経験が豊富やから、合理的ちゅうか、むだな動きのないプレゼンティングしよるさかい、対応しやすいとはいえる。もっともどんなメスカて、性衝動が極度にたかまったら、やっぱりおとろしいで。逆にオスにマウントしてみたり、相手の背中にとび乗って性器こすりつけたり、首っ玉にしがみついで、あかんぼがぶら下るみたいに腹側にぶら下ったり、座ってる相手の頭の上によじ上ったり、とびけりしたり、すさまじいこともしよる。

学 相手のオスは怒らへんのか。お前やはどうやねん。

猿 ふだんやったらもちろん怒るし、第一、ふだんはメスカてそんな無茶なことせえへんけど、なんでかそういう時は、わしら毒気ぬかれて怒りそびれることがあるな。なんぼ年いったかて、メスはどこかわからんとこがあるねん。

学 そのメスがオスとマウントするというのは、ふつうのマウンティングか。

猿 いろいろや。後ろから、足、地面につけたまま、かぶさるようにしがみつくやつ。こどもがお母はんの背中に乗るみたいに乗ってまうやつ。オスのやる典型的なマウンティングの姿勢は少いな。不完全か、変形が主や。

学 すると、メスのマウンティングは、性的衝動のたかまりに結びつくもんがほとんどやと思て

ええわけか。

猿 そうやな。それ以外はまあ希やな。

学 聞いてて思たんやけど、オスメスの性的交渉が始まったら、オスはメスに対して攻撃性をおさえようとしてるみたいやな。

猿 そらそうや、攻撃性むき出して接近したら、相手は逃げてしまうか、おとろしがるかして、ことはうまいこと運ばへんがな。相手の目え見つめるときかて、くちびるばくばくさして、やさしゅう見えるように気を使うて。

学 ところが、二匹がつれ合い関係に入ったら、メスは逆に抑制がとれるあやうのんか、攻撃性むき出しみたいなふるまいに及ぶねんな。

猿 そうや。踏んだりけったりみたいなことができるわな。これすべて往衝動のたかまりのなせるわざやろけど。

学 おもしろいなあ。

猿 何がおもしろいねん。ちよっともおもしろいごどないわい。さいせんいうたような心理的ブレーキが作動して、腹が立ちにくいだけじゃ。

<次号に続く>

人間生態学への招待(2)

本郷支部長

2. 分布(つづき)

前回の(1)からずいぶんと月日がたってしまった。会員諸氏は、もはや前回がどんな話だったのか忘れてのことだろう。しかし、都合のよいことに訂正しなければならぬところがある。第22号を見ていただくことにしよう。789ページに労働者階級と「旧中間層」の分布図がのっているが、地図が逆になっている(「旧中間層」というのはまちがいで、「旧中間階級」が正しい)。旧中間階級には農民が多く含まれているので、東北地方や南九州に多いのである。つまり、近代日本は急速に資本主義化を遂げてきたが、その速度には地域差があり、東北や南九州は資本主義の浸透が比較的遅れていたのである。これに対して、南関東や京阪神には旧中間階級が少ない。これらの地域は早い時期から高度の資本主義化が進んでいて、大多数の人々は資本主義的な関係に組み込まれてきたのである。

しかし、各都道府県の中にすべての階級が均質に分布しているわけではない。通常、それぞれの産業は農業地域、工業地域、商業地域などのように特定地域に集中している。さらに重要なことに、住宅地にも豊かな地域と貧しい地域がある。こうしたことから、ひとつの都道府県の中にも、さらには一つの都市の中にも、資本家階級の多い地域、新中間層の多い地域、労働者階級の多い地域、旧中間階級の多い地域などがあるのである。こういう現象をセグリゲーションという。

こうした地域による階級の「棲み分け」には、人為的なものと歴史的・自然発生的なものがある。たとえば、高級住宅地の代名詞のようになっている東京の田園調布は、イギリスのハワードという人の設計した「田園都市」をモデルに澁澤榮一が建設した、生まれながらの高級住宅地である。また、本郷の近くには西片(にししかた)という超高級住宅地があるが、これはかつて福山藩の屋敷のあったところで、元の藩主だった阿部家が意図的

に「学者町」にしたものである。だからここには先祖代々東京大学教授という輩が何人も住んでいる。火でもつけてやりたくなる地域である。だいたい、大名屋敷のあったところというのは、高級住宅地か、でなければ大学とか大使館とかになっているのが普通である。目白、麴町、赤坂、麻布、芝などみんなそうである。特権階級の地域は時を隔ててもやはり特権階級の地域のままなのである。これに対して、当時町人町だったところは現在では商店街かゴミゴミした住宅地になっていて、自営業者が多く、近くの安アパートに学生や店員、工員などが住んでいたりする。

また、明治にはいつから形成された新しい住宅地にも、いろいろとランクがある。ランクの上に位置するのは、世田谷、中野、杉並といった地域であり、下に位置するのは板橋、北、足立といった地域である。両者の地域には、明らかな地価・家賃の差がある。東京の人々はどこがランクの上の地域なのかということをよく知っていて、住所で人の社会的地位や経済状態を判断したりする。そして、人々は地位や収入が上昇すると競ってランクの上の地域に移り住もうとする。私の指導教官なども、つい最近杉並の高級住宅地に大きな家を建てた。東大教授とはいっても、国立大学の教授である以上給料がそう高いわけではない。彼は奥さんも大学の教官をしており、しかも二人とも売れっ子なので講演収入がかなりあるらしいのである。ところが、こういう連中に限って、日本は貧富の差が小さくて階級間の差がないとか、アメリカと違って日本にはセグリゲーションがないとか言うのである。

社会学や経済学者のなかに、ことあるごとに「日本は人口のほとんどが新中間層で、上下の差がない」とか「階級という概念はヨーロッパにはあてはまるが日本にはあてはまらない」とか主張する連中がいる。こういうのは信用しないほうがよい。彼らがこう考えるのはなぜかという、彼らがいつも新中間層、それも同業の研究者とか、専門職、役人、経営者といった高学歴の人々としか付き合っていないからである。自分の知り合いがみんな新中間層だから、日本人はみな新中間層だと思い込んでいるのだ。つい最近も、アメリカ掃りの知人の社会学者が、アメリカでは貧困問題が深刻だとふれまわっていた。貧乏人なんか日本にもいくらでもいる。ただ、ふだん付き合いがないから知らないだけだ。

セグリゲーションの存在には、重要な社会的意味があると思う。日本国民の9割近くが自分を中流だと思っているという調査結果がある。この調査結果には疑問がある。まず、質問の選択肢がおかしい。「上」「中の上」「中の中」「中の下」「下」の5つの中から一つ選ぶことになっているのである。これでは仮に各選択肢が同数ずつ選ばれたとしても

6割が「中流」になってしまう。また、「上」とか「下」とかいうのは「普通でない」というイメージがあるから、選びにくい。たとえば、「あなたの身長は高いほうですか、低いほうですか、それとも中ぐらいですか」と問われたら、おそらく3分の2ぐらいの人は中ぐらいだと答えるだろう。この調査は、はじめから「中流」が多くなるように出来ていたのである。しかし、それでも9割は多い。なぜだろう。セグリゲーションのせいだ、というのが私の考えである。金持ちは金持ちの地域に住む。貧乏人は貧乏人の地域に住む。そうすると、いずれにしても近所には同じぐらいの生活程度の人が住んでいることになる。近所の人々との比較で見れば、確かに彼らは「中」だろう。「中流」意識が政治的無関心、あるいは自民党支持に結びついているという証拠はいくつかある。セグリゲーションはこういう政治的な効果も持っていると思う。

3. 発生

3年ほど前、「金魂巻」という本がベストセラーになった。例の「マル金」とか「マルビ」とかいうやつである。ほんとはオリジナル通り記号で書けばよいのだが、ワープロにはそんな記号はないし、会長の使う和文タイプにもないだろうから、「マル金」「マルビ」と書くのである。この本のなかに、次のような一節がある。

マル金の重要な特徴は、一流企業の重役かできれば社長の息子なことです。「ばかな。それなら、はじめからマル金じゃないか!」と、今、怒ったあなた、そのとおりです。すでにマル金、の息子が東大を卒業して、さらにマル金になるのが現代における「マル金の相乗効果の法則」です。

この指摘は正しい。階級所属には、一種の世襲的性格があるのである。しかし、前近代社会と違って、いちおう民主主義の社会である現代では、生まれながらにして身分が決まっているというわけではない。だから、すべての人が親と同じ階級に所属するわけではない。ではどの程度の世襲性があるのだろうか。下の表を見ていただきたい。これは、日本に住む20-69才の男性の父親の所属階級と本人の所属階級の関係を見たものである。

父親\本人	資本家階級	新中間層	労働者階級	旧中間階級	合計
資本家階級	21.5%	31.5%	18.5%	28.7%	100.0%
新中間層	7.3	51.3	24.7	16.7	100.0
労働者階級	2.9	21.5	59.5%	16.1	100.0
旧中間階級	5.7%	21.1	33.1	40.0	100.0

出典：『社会学評論』146号

一見して、対角線の部分、すなわち、父親と同じ階級に所属している人々の比率が高くなっていることがわかる。たとえば、全体では資本家階級は数%しかいないのに、資本家階級の子どもは21.3%が資本家階級なのである。七かも、新中間層のなかにはほそのうち出世したり親の跡目を継いだりして資本家階級になる者が含まれているだろうから、実際はもっと多いだろう。それにひきかえ、労働者階級の子どもは60%が労働者階級である。人々がどの階級に所属するかは、明らかに、親がどの階級に所属していたかに依存している。

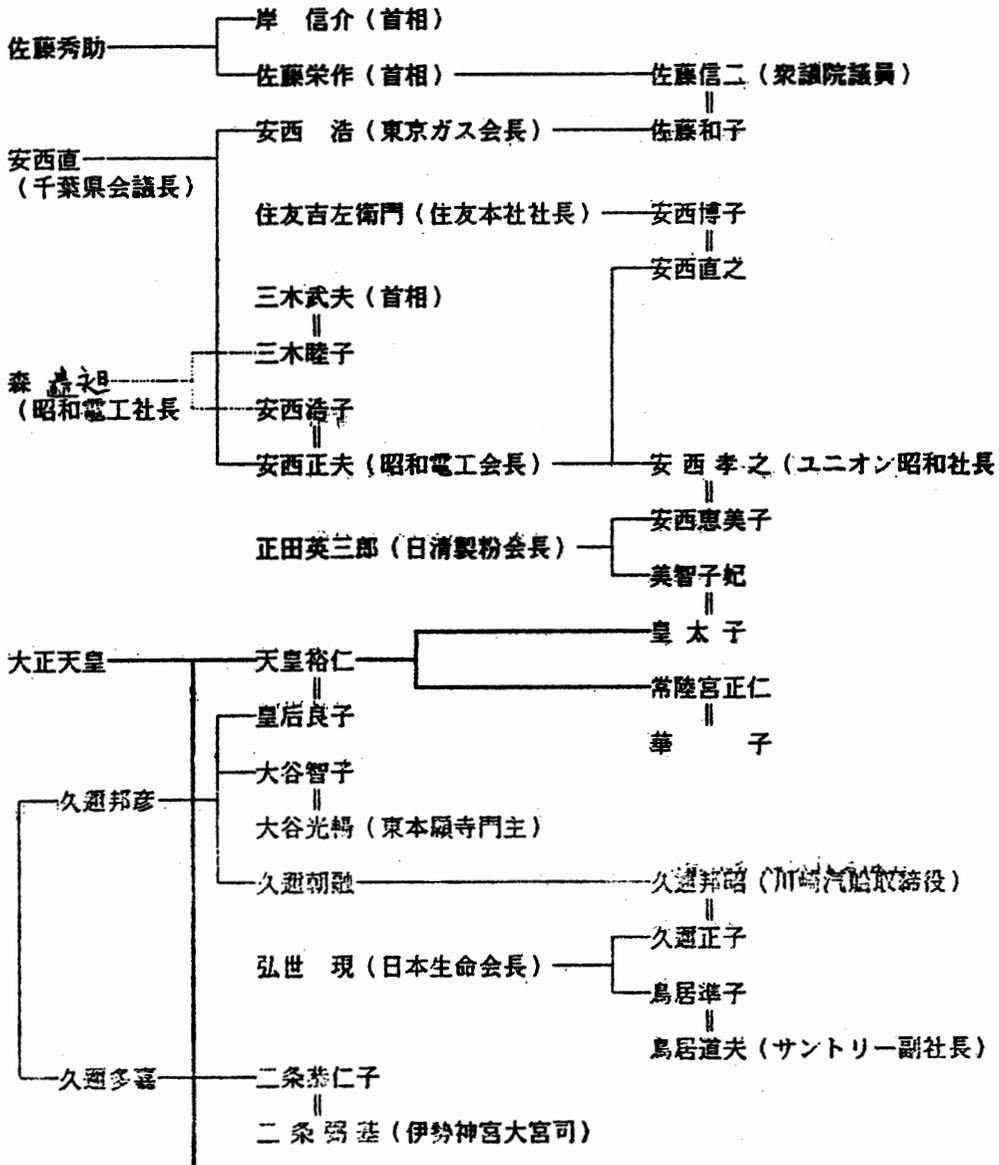
しかし、先に言ったように、今は民主主義の世の中である。人は親と同じ階級にならなければいけないという法律があるわけではない。では、なぜこうなるのか。それにはいくつかの理由がある。簡単にいうと、「カネ」「コネ」「教育」である。

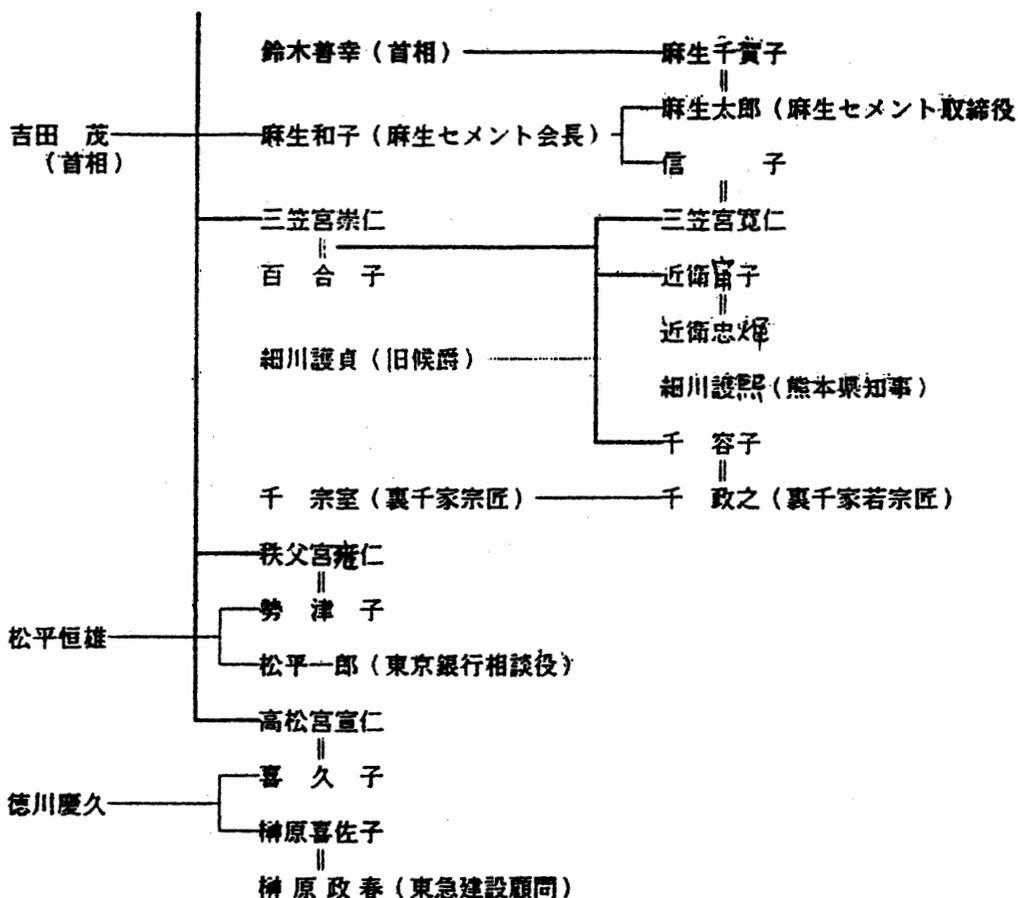
第一に、資本家階級は親から子どもへと財産を相続できる。財産には株券や工場などの設備が含まれる。こんなものをもらえば資本家階級になれるに決まっている。旧中間階級の場合でも、規模は小さくても店や農地などを相続できるから子どもは旧中間階級になりやすい。第二に、資本家階級はいろいろなコネを持っている。コネがあるから、子どもを一流企業に入れることも、子どもの事業を援助することも、子どもを資本家の娘・息子と結婚させることも容易である。こうして資本家の子どもは資本家となる。第三に、資本家階級や新中間層の家庭は、いわゆる「文化水準」が高い。カネがあれば本も買えるし、美術品なども置けるし、旅行もできる。家庭教師だって雇える。親は高学歴者が多いから、子どもの勉強も見ることができ、家族の間でも、多少は高尚な話もするだろう。こんな家庭に育てば、才能のあるなしとは別に、成績は良くなるだろう。成績が良ければ大学へ行ける。しかも、子どもを大学にやる金は十分にある。大学を出れば、少なくとも新中間層にはなれるし、そのうち出世して資本家階級になる可能性だってある。こうして、「マル金の子はマル金」になるのである。

これが現実というものだ。しかし、こんな現実を見えにくくしているものがある。それが業績主義のイデオロギイである。業績主義のイデオロギイとは、親が何であったかとは関わりなく、才能のあるもの、努力したもの、優れた業績を挙げたものが高い地位と収入を得るのだ、というひとつの信念であり、神話である。この神話によって、高い地位にある人々は才能ある人々、努力した人々とみなされ、与えられる高い報酬が当然のものとして正当化される。逆に、低い地位にある人々は才能のない人々、怠惰な人々とみなされ、報酬は低くて当然だとされる。業績主義こそは、資本主義社会の不平等を覆い隠してきた

最強のイデオロギーである。

さて、先ほど資本家階級の子どもは資本家階級の子どもと結婚しやすいということを書いた。だとするならば、そのうち資本家階級は親戚ばかりになってしまうだろう。むっとも資本家階級はけっこう数が多いからすべてが親戚にはならないが、こうした血縁関係・姻戚関係にもとづく資本家階級のネットワークというものは確かに存在する。しかも、重要なことは、このネットワークにおいて占めている天皇家の位置である。次の図は、私が本と週刊誌の記事を集めて丸2日かけて作った、天皇家と政財界その他の重要人物たちの相関図である。





まさに見事としか言いようがない。主だった財界人、歴代首相、宗教家、家元など、経済・政治・文化の各領域で日本を支配する人々は、天皇家を中心に血縁・姻戚関係で網の目のように結びつき、現代日本の支配層を形成しているのである。特に注目したいのは、皇太子と美智子の結婚が果たした役割である。この二人の結婚は何をもたらしたか。美智子の実家の正田家は、名門 安西家を介して三木・岸・佐藤の歴代首相、住友財閥へと連なっている。考えてみてほしい。二人の結婚は1959年。当時の首相は岸である。これは裏に何かないほうがおかしい。二人の結婚は「テニスコートの恋」などと呼ばれた。テニスブームが始まり、親たちは娘に競って「美智子」と名付けた。しかし、これは実は、昭和史最大の、仕組まれた政略結婚だったのである。

今、浩宮の結婚が取り沙汰されている。相手の条件はいろいろ難しいらしい。まず、結婚費用が膨大になるので、金持ちでないといけない。働いた経験のある者はダメ。もちろん、美人でないといけない。また、過去・現在を問わず、特定の男友達がないこと。さらに、浩宮は身長が低く、確か163cm位しかない。女はハイヒールをはくので、少なく

ともこれより5cm低くないとダメなそうである。それに、当たり前といえば当たり前だが、候補に挙げられて敬遠する向きも多いらしい。話の来る前にと急いで他の男と婚約したというようなケースがいくつかあるようだ。浩宮は今28才。たぶん結婚は天皇と皇后が死んだ後、来年以降になるだろうが、いずれにせよ日本の支配層に新たなネットワークを付け加えることになるだろう。

なお、大学教授にも同じようなネットワークが形成されている例がいくつか知られている。有名なのは穂積家。後に東大法学部教授となった穂積陳重が澁澤栄一の娘、歌子と結婚したのが始まりで、以下の家系には和辻哲郎、尾高邦雄、尾高皇之助、八杉竜一、安藤良雄、宇野精一などの高名な学者がずらり並んでいる。親が東大教授だと助手になりやすいという話もある。教授が自分の言いなりになる若手研究者を娘と結婚させるというような話もよくあることである。やはり、自分の家から多くの学者を輩出して「名門」と呼ばれるようになることを夢見るのだろう。

さて、「発生」の話の次は何に移ればよいのだろう。行動とか食物連鎖とか、いろいろありそうなのだが下手に書き始めると後で取捨がつかなくなるおそれがある。今回はここまでにしておこう。

今、東大では「学院構想」というのが問題になっている。これは一言でいうと、学部の後期過程と大学院の修士過程を一体化して、学生は原則として4年間の専門教育を受けることにし、他の大学に差をつけようというものである。この裏には、教授たち、特に理科系の教授たちの危機意識があるらしい。東大からノーベル賞受賞者が出ていないというのは有名な話だが、東大に対する社会的評価はこのところ低下しつつあるように思える。工学関係でのすぐれた（工学関係でのことだから、これは産業に役立つ、という意味だが）研究は大学よりもむしろ企業で行なわれている。学生もかつてのように誰でも一流企業に就職できるというわけではなくなっている。また、優れた人材が集まってくるという訳でもない。人事には学閥・派閥・門閥が幅をきかせているのが普通だし、最近では権威主義と派閥争いをきらって、東大への誘いを断るといった例さえみられる。自分の誇いた種とはいえ、教授たちにとっては、これでは困るのである。東大の地位は自分の地位である。東大は最高学府でなければならない。だからこそ、自分はエリートでいられるのだ。東大は「国威をかける程の重点大学」（総長室文書より）でなければならない。「東大はとなり百姓ではない」（S教授）のである。しかし、そのためにはどうしても政府の協力が必要

だ。そこで東大当局は政府にすり寄った。文部省の方針に従って、寄付講座（企業献金で作る講座、NTTやNECからの寄付による設置が決まっている）も作ったし、付置研究所の改組にも着手した。こうして、東大の地盤沈下を防ぐための「改革」を実現しようというのである。東大の教授たちをめぐっては、他にもいろいろ面白い話があるのだが次の機会にしよう。

日本生物学会・東京サミットの件、大賛成です。ぜひやりましょう。私の電話番号は、934-8568です。栗岡さん、それに他の支部長さん、連絡待ってます。私は飲み代を人にたかったりはしないのでご安心下さい。あ、それから近々金沢へ行きますのでよろしく。

「ダーウィン入門」

G. G. シンプソン著 奥野良之助訳 どうぶつ社 1987年 2200円

生物学者を目指す者の多くは進化について何らかの関心を持ち、それを自然界に垣間見ようとする。その進化を語る時、真っ先に名前が挙がるのがかのチャールズ・ダーウィンであろう。私にとってもダーウィンは「いつも気になる奴」であった。<ダーウィンに対して「奴」とは何だ、怪しからん！— シンプソン> そんな折、この世に The Book of Darwin なる本があり、それをかの奥野氏が翻訳したと知って私は一も二もなく「下さい」と申し出た。しかし、氏いわく<「師いわく」じゃないのか。ああそうか、君は非弟子だから「非師いわく」やったな— 会長> 「厚かましい！」

「確かにそう思いますが、それでも下さい」

「では、ちゃんと読んで書評を書く、という条件で一冊やろう」

(しめしめ、もらってしまえばもうこっちのもの……) 「ありがとうございました」

かくして私は本をせしめ、今これを書いている。ただし、一読はしたものの「ちゃんと」読んだかどうかは自信はないが……。<ちゃんと読んでない方に、オレは「自信がある」— 会長>

さて、本書の著者はアメリカの古生物学者、ジョージ・ゲイロード・シンプソンである。彼がダーウィンの著作を引用しながら、その思想を「ダーウィン自身に語らせた本」といえよう。

本書は10章からなる。1、2章はいわゆる「ダーウィン革命」をコペルニクス革命と比べそれらのどういふ点が「革命」なのかを論じている。3章はダーウィンの誕生から青年期まで、4章は軍艦ビーグル号による航海を説明している。5、6、7章ではダーウィンが科学者としていかに成長し、どのように進化論を着想し、どういう準備をへて「種の起原」を著すにいたったかが述べられている。8章はダーウィンと植物学とのかかわり、9章には人類の起原についてが書かれている。以上のなかで、第7章「種の起原」が本書の中核部分であり、一番興味がそそられた。

さて、この本の目的は「ひとつは、ダーウィンがどのような背景のもとでどのように考えを発展させていったのか、最低限の知識を提供すること、もうひとつはダーウィンの生活を描くことによってその人物像を明らかにすること」(p. 12~13) となっている。この目的は本書のなかでうまく達成されている。300ページ余りの本書を一読すれば、ダーウィンの主たる著作— 「ビーグル号航海記」「種の起原」「人類の起原」「ダーウィン自伝」— の一部を少しづつかじったことになる。引用はおおむね細切れではなく、所々にシンプソンの「解説」があるため解

り易い。半分以上が引用である点で、この本はまさに「ダーウインの本」であるといえよう。<“まさに”というの、100%、せめて95%くらいを指す言葉だろう。生態学者は“数量的取扱”に熟達しなければならない> ただし、少し気になる点が2つある。

ひとつは、シンプソンがあまりにダーウインをひいきして、その学説、思想から人間性までを絶対視している点である。例えば、次の部分にはダーウインの業績への高い評価と共に、強いきり入れを感じる。「事実として彼の思想はまさに独創的なものであった。さらにいえば、百歩ゆずって彼の思想が独創的ではなかったとしても、なお偉大な歴史的人物であったことには間違いはない。生物学者に進化の思想を全面的に受け入れさせたのがダーウインであることは一つの歴史的事実であり、新しい世界へのとびらを開いたのは彼であって他のだれでもないからである。」(p. 279) また、ダーウインがその生涯の後半を過ごしたダウンの家を、「すべての生物学者にとって、それこそ巡礼の聖地といえよう。」(p. 132) と称している。さらに、ダーウインの自己分析について「自伝」を引用したあとで「期待どおり、ダーウインは自己の長所と短所を正直に評価する能力を持っていた。」(p. 274) とある。こんな「期待」をかけるほどにシンプソンはダーウインを敬愛していたのであり、したがって本書のダーウイン評価が客観的なものではないのでは、という懸念が生じる。特にウオレス及びラマルクとの関係は学説そのものとその歴史的評価の事実関係を学んだ上で、あらためて追求してみたい。<「期待」してるよ>

もうひとつは、本書からだけでは当の著者、シンプソンの学説、思想、人間性はほとんどうかがえない、という点である。シンプソンは終始ダーウインの引用の影に陰れ、時々ちらりと顔を出して解説するだけである。本書を評するに当たって、シンプソンを評すればいいのか、ダーウインを評すればいいのかは今もってよくわからない。<“訳者”を評する、という手もあるよ> 本書はあくまで“ダーウインの本”なのだから、著者自身はわき役でよろしい——シンプソンはそう考えたのであろう。<何しろ80歳で書いたのだからね> しかし、一体どんな奴がどんなつもりで<急にガラが悪くなったな>こんなにもダーウインをほめるのだろうか、という素朴な疑問はおさえがたい。<“素朴”かねえ?> しかし、シンプソンがどのような人物かは、他の著作を読まねばわからないだろう。

この本はあくまでも入門書であり、解説書である。ダーウインからの引用は多いものの、ダーウインの著作そのものとは違う。著者は言う。「かつて書かれた旅行や冒険の本のなかでもっとも魅力的なものの一つであるこの「航海記」を直接読まれることを、貴男もしくは貴女に強くすすめておく。」(p. 89) 「読者はぜひ、「種の起原」全文を読んでほしいと思う。本書ではほんの見本を提供するだけであり、内容の説明も、たいそうかぎらざるを得ないのだから。」(p. 156) これらの言葉は顔面通りに受け取っておこう。本書は、これら「原著」への橋渡しとしてもいえようか。

さて、本書を読んで一番興味深かったのは、読むほどにダーウインが身近に思えてきた点である。＜偉そうに批評してるが、それこそがシンプソンのねらいで、まんまと術中にはまっているではないか＞ ダーウインは、一世紀以上前のイギリスの学者である。その一世紀という時間を、著者シンプソンが埋めてくれる。ダーウイン没後、生物学、特に遺伝学の進歩は目覚ましく、私たちはそれらを踏まえた上でダーウインを理解しなければならない。その点、第10章「現代に生きるダーウイン」の著者による解説は解り易い。＜遺伝学の進歩を“踏まえて”ないので、10章は、訳した本人がよく解ってない。それを読んでよく解ったということは、ひょっとすると君は天才ではないか！？ — 訳者＞

一方、イギリス、アメリカ — 日本、という距離を、訳者奥野が埋めてくれる。＜そんなことした覚えはない。イギリスへもアメリカへも行ったことないもん＞ 本書は非常に訳注が多く、その内容は機知と皮肉に富んでいていかにも奥野氏らしい。＜オレは機知と皮肉だけで生きてるんか＞ 進化論に興味のない人も、本屋で訳者の注、解説、あとがきを一読すればそれなりに楽しめるであろう。＜そんなこととしてはいけない。ちゃんと購入して全部読んでいただきたい — 訳者＞

(綿子屋ヒテシ)

以下に「まぼろしの未完の大作・予告編」を示します。すごいでしょ。

- ① ダーウインとウォレス (自然選択の着想)
- ② ダーウインとラマルク・今西 (自然選択説の限界)
- ③ ダーウインとシンプソン、そしてウィルソンとドーキンス (新ダーウイン主義批判)
- ④ 以上を踏まえた私自身の論 (???)

＜ええかげんに夢から覚めて、山の土でも踏まえに行ったら — 非師匠＞

本会会長 奥野良之助氏の、空前にして（おそらく）絶後の名訳、
アメリカ古生物学界にこの人ありと知られた、ジョージ・ゲイロード・シンプソンの
死の2年前、80歳で書いた、
生物学界最高の巨人、チャールズ・ダーウィンについての評論、

「ダーウィン入門」（原題：サ・ブック・オブ・ダーウィン）
どうぶつ社刊、2200円...

ダーウィンのことを知らない人も
ダーウィンについてよく知ってる人も
読めば何となくタメになる本

会長と、当会会員でもあるどうぶつ社編集者との会話

編集者：先生が、出せ出せ、言うから書いてきましたけど、載せてから広告代もついでに出せ、
などと言わないでしょうね。

会長：別に出せ出せ言うた覚えはない。君が勝手に書いて持ってきたんやないか。

編集者：そんなことないですよ。だって、先生が手紙で………

会長：しいーっ、大きな声出すな。君は生物学会の会員やろ。会員の投稿は「無審査・無修正・
無責任」に載せることになってるのやないか。あんまりウラをばらすもんやない。

編集者：どうもよくわかりませんが、そんなものですか。

会長：そんなもんや。それはそれとして、「ダーウィンのことを知らない人も ダーウィンに
ついてよく知ってる人も 読めば何となくタメになる」ちゆうのは、ちょっと書きすぎや
で。誇大広告やな。

編集者：そんなことないですよ。私はこれ読んで初めてダーウィンのことがよくわかったような
気がしましたし、ダーウィン通の〇〇さんも、面白かったって言ってましたし。

会長：君はともかく、〇〇さんの言うことは当てにならんで。もともとあの本は、君とこの社
長が本送ってきた時、これは、ダーウィンを知らん人が読んでも何もわからんし、ダーウ
インをよく知ってる人が読んでも大して得る所はないし、結局だれの役にも立たん本や、
言うて、翻訳断わったんやで。

編集者：ホントですか。そんな話社長から聞いてませんよ。

会長：ホンマやで。そしたら社長が、それやったら初めての人にもわかるように、訳注と解説を奥野さんがつけてくれたらええ、言うて、強引におしつけてきたんや。それだけやったらまだしも、翻訳権とってしもたから、1年おくれたら罰金払わんならん、言うて、脅迫付きや。

編集者：まあ、うちの社長もそれ位のことやりかねませんけど、先生の言われることも、相変わらずどこまでホントか、よくわかりませんね。

会長：相変わらず、は余計や。まあ、この間もある女子学生が、「先生の言われる事は100%冗談やと思ってる聞いてます」などと言いよってなあ。女子は疑ぐり深くてかなわん、君も含めて、な。

編集者：お宅にも、もっとかなわん人がいらっしやいますし、ね。

会長：君も相当口が悪くなったな。だいたい、卒業生である君が、どうぶつ社などに入ったのがよくない。人質とられたみたいなものて、社長の言う無茶もきかんらんことになる。おかげでひどい目に合うた。

編集者：それでも社長は、いい本ができた、我が社の財産や、言うて喜んでましたよ。訳注と解説がなかなかいい、と云って。

会長：社長はホンマに本文読んだんかいな。原稿送った時、お返し返事が来て、訳注と解説だけ読んだが、面白いから出版する、いうんや。本文読まずに出版する出版者なんて、あんまりおらんで。

編集者：でも、あの訳注、なかなか面白いですよ。そうだ、面白そうな訳注をいくつか、広告につけておこう。

会長：そんな恥しいこと、止めとけ。

編集者：だって、私は会員ですから、何でも投稿する権利があるんですよ。「無審査・無修正」で載せて下さいよ。

< “広 告 追 記” 訳注傑作集

本文（ダーウィン「自伝」の一節）私はたまたま、楽しみのためにマルサスの「人口の原理」を読んでいた。同じ原理が自然においても働くとすれば、好ましい変異は保存され好ましくないものは滅ぼされるにちがいない、とはっと気がついたのである。……しかし、先入見をさけるべくあまりにも気を使っていた私は、当分のあいだその理論のごく簡単なスケッチさえ書かないでおこうと決心した。その禁を解いたのは1842年6月のことで……

訳注：ダーウィンがマルサスを読んだのは1838年10月だから、執筆禁止期間は何と4年8ヶ月におよんでいる。思いついたらたちまち書いてしまう訳者とは、人間の出来が少々ちがっているらしい。

本文：昔から固い友情で結ばれていた親友ライエルは、そのころまだ確固とした非進化論者であったが、「種の起原」が出版された時すでに62歳であったにもかかわらず、その心は柔軟で、進化の真理を受け入れたのである。一方、当時まだ55歳のオウエンはついに受け入れず、反進化論者にとどまった。

訳注：私はちょうど55歳であるが、もしいま、このような革命的な学説が出て来ても、すんなり受け入れるかどうか、自信はない。

(編集者注：ダーウィン以来の革命的進化論として、生態学の中でもはやされている“社会生物学を、奥野先生はガンコに受け入れず、あちこちでその悪口を言いふらしておられます)

本文(若き友人へのダーウィンの手紙の一節)：私の意見を卒直にいわせてもらえば、君の論文がもっと簡潔に、もっとかざらずに書かれていたら、いっそう良かったと思います。……私は文章を書くとき、実際上の意味をそこなわずに省略できることを一つ一つ考えながら文章の構想を進めていくことにしていますが、この方法はきわめて有用です。

訳注：翻訳に苦勞した訳者から一言。ダーウィン自身、ここに書かれている執筆態度をもっと徹底してほしかった。

本文：ダーウィンの墓は、ウエストminster寺院の中心部をとりまく回廊の北側の部分にある。その近くには、アイザック・ニュートン郷をはじめダーウィンの仲間としてふさわしい人々が眠っている。ダーウィンは生前、数々の学会から名誉を受けていた。ところが、国家的名誉はその遺体に与えられた墓所だけであったということは、少々異例である。これはむしろ、大英帝国の不名誉といえよう。

訳注：おそらく、ライエルをはじめすぐれた科学者にたいして与えられているサーの称号をダーウィンに与えなかったことを指しているのであろう。しかし、私はダーウィン郷より、たんなるミスター・ダーウィンの方が好きである。

<会長注：こんな訳注だけをとり上げられると、この本全体、ひいてはダーウィン、シンプソン、そして私までが誤解されてしまいそうである。ダーウィンもシンプソンも真面目な人だし、私だって本性は結構真面目なのである。その証拠に、次のような真面目な訳注もついている。

「不可知論：「意識に与えられる感覚的な経験を越えた、その背後にある客観的な実在は認識できぬという説」(「岩波小辞典・哲学」)。ここの文脈で平たくいえば、確かめることはできないので、神が存在するかどうかはわからない、と考える立場であって、神を否定する無神論とは異なる。シンプソンはダーウィンを、不可知論の段階にとどめたわけである。無削除版の「自伝を読むと私などは、ダーウィンは無神論まで達していたのではないかと思うが、これは私が無神

読者なのでそう感じるのかも知れない。>

こいは マジメ
「広告」です。

<会長と3局長との会話>

会 長：どうや、オレでも難しいこと知ってるやろ。

3局長：昔年話兵、ひいただけやないですか。



第9回

広告

全国自然保護学生交流会

- 環境問題・自然保護などに関心のある全国の学生が、毎年夏に集まって交流するものです。
- 85年は金沢大・86年は愛媛大・87年は酪農学園大を会場に、約100人が集まって行われ、今年第9回は京都大を会場に行われることになっています。
- 自然保護・環境破壊・公害・原子力・エコロジーなどの問題、さらには、女性問題・「障害者」問題・南北問題などに関心のある学生の皆さん!(そして社会人の方も)今夏京都に集って共に語り、交流しましょう。私たち実行委員会は、皆さんを歓迎します。

実行委員会 京都市左京区吉田牛ノ宮町21地塩寮

Tel. [REDACTED]

*交流会の準備のよろすを伝えるニュースレター『じくじく』を発行しています。お問い合わせ下さい。

と き 8月5日(金) ~ 8月7日(日) (予定)
と こ 京都大学吉田キャンパス

JR京都駅前から市バス206系統祇園・百万巡行まで東一条下車
参加費 約5000円(食費・宿泊費含む)

第9回全国自然保護学生交流会実行委員会

(その1)

会長さん 編集局のみなさん 新年おめでとう。

昨秋 やっと異常な人口密度を持つ教養部を無事脱出でき(留年がいっぱいいたの)のびのびと呼吸のできるくらいの広さはある 専攻課程のキャンパスにうつりました。飛行機の着陸コースの下なので 大好きな飛行機がいつでも ごう音をたてで飛んでくれるので うれしくてたまりません。エンジン音で機種の判別もうまくなりました。出席もとらないし 全部選択課目なので (実験も! やりたくないのはしなくていいの♪♪ もうたのしくて! 勝手なことでもいいんだもの。教養部のときはメニューも決められて もうノイローゼ寸前だったけど ヤッと生き返ったみたい。私は自由でないと生きられないの。

ところが 周りの人はほとんど間違えてが玉になっていくんだもの。なんかかわいそう。夜中までこき使われてるのに それがたのしいなんて思ってる人だらでいるの。自分で考えついたことならまだしも 他人の使い走りなのにねえ。そんなことばかりしてたら 自分の頭で考えたり思ったりすることなんか忘れて 花のにおいも星の色もなあんにもわかんなくなって ヒトでなくてキノコになってしまうのに……おきのどくに。

私はちゃあんと日本生物学会で“教育”されてるし だてに大学2つも行ってると訳じゃない。前の大学では政治学だったんだもの(中退したけどね。退学届って書いてみたくて……なんてことなかったけど)要領の良さはまかせて!! (中退に関しては 魔の日本生物学会が深く関わっているひじょうにオモしろいハナシがあるが 書くのが面倒なので秘密にする。フ フ フ……) これを読む学生さんも (あんまりいないか) こういう手を使えば単位は大丈夫というのを 1つごひろうしましょう。(ただし男はやらない方がよい) とにかくおじさんに対しては微笑むことです。選挙といっしょです。カエルの実験を教養でやらされるととき 途中でマスイが切れたときなんかは もう Good timing! すぐに教授なり助手なりのおじさん呼びます。動き出したときなどに(カエルが) きゃあっといって白衣のソデに抱きついたりすると もう単位はあなたのもの。実験でなくても こういう具合におじさんを舞い上らせるのが一番!! シケンがめっちゃめっちゃ 出席がほとんどないアナタも 試験前にこうしておじさんをおかぬいければよい。<なんでこんなことを“おじさん”がタイプせんならんのやー 会長> ちなみに実験のセンセイは次回から 頼みもしないのに白衣のソデをまくりあげて「さあ 今日もうええっ!!」なんて言って来てくれて 私の実験をせえーんぶやってくれました。他の人が5時までやってるところを 私は毎回3時前後に帰宅の途につけました(12回もこーゆーことをやってくれました。アホなセンセイ)こんを読んで そんなことじゃ自分のためにならない などといきどおってる学生さんは もうカモです。日本生物学会誌を1号から1字1句たいせつに読んで身を清めなさ

い。日本の将来は嘆かわしいとお嘆きのおじさんたちは かつてに嘆きなさい。国家がなんほのもんですか。しょせんあなたは旧人類。けっきょくお先にあの世行き。

ああ どこで話がそれてこんなアホなことを書きつつってしまったのでしょうか。わたしが言いたかったのは次の文だけなのに……

「86年、87年、88年要分会費計300円 ツケにして下さい」

それではまた お元気で

<エエ加減にせえよ！ - 会長>

3局長：会長、また1人、人三間違わせましたね。会長の責任ですよ。

会 長：そんなこと知るか。勝手に間違いよるんやないか。

3局長：だって、会長が日本生物学会なんて変なものつくったからですよ。これさえなければこの人だって、まともな“政治学者”になってたかも知れない。

会 長：政治学者にまともな奴などいるもんか。どうせロクなものにはなっとらん。

3局長：そんなこと言うと加藤先生に怒られますよ。

会 長：ああ、加藤さんは政治学者やったなあ。まあ何にでも例外ちゅうのはあるもんや。

3局長：すると、この人は人生間違っ、生物学者になった方が良かったと言うんですか。

会 長：そら判らん。やっぱりまともな生物学者なんておらんしな。

3局長：それはたしかです。会長も含めて。

会 長：いや、例外はあるて。

3局長：自分や、言いたいんでしょう。

会 長：そう思っても自分で言わんところが紳士というもんや。

3局長：まあ、ノーベル賞学者と握手した、言うて威張る人もいますからね。ところで、こんなもの載せたら、金大の学生が書いたと思って、だれか探す教授が出てくるんやないですか。間違われた人は迷惑ですよ。

会 長：白衣のゾテに抱きつかれて鼻の下伸ばしたセンセイは、だれや、とかな。面白いやないか。びったりの人もいるしな。

3局長：それは、鼻の下伸ばすんやなくて、口の下を伸ばすんでしょう。

会 長：そこまで言うな。学会誌の品が落ちるやないか。

3局長：もともとあんまり上品 だとは思えませんがねえ。品はよくないけど、「国家がなんほのもんですか。しょせんあなたは旧人類。けっきょくお先にあの世行き」いうのは、なかなか名文です。句調もいいし、これからちょいちょい使わせてもらいます。

会 長：オレにやりこめられた時に使おうと思とるんやろ。

3局長：実はそうです。

会 長：そやから君らは甘いんや。そのうち日本の経済が崩壊して、食うもんもなくなるやろ。

3局長：そんなこと、起こりますか？

会 長：起こる、起こる。その時、せいたくに育った君らはたちまち飢えて、あの世行きや。戦中戦後の食糧難時代を経験してる我々は、そういう時にどうしたらええか、ちゃんと知ってる。旧人類の方が長生きするんやで。

3局長：そうになったら、年寄りから順番にオバステ山へ行ってもらいますわ。ところで、会費300円、ツケにしてやるんですか。会長は女の子に甘いからなあ。

会長：そんなことはない。オレはまだ、白衣のソデにすがってもらってないから、ツケはきかん。

(その2)

前 略 日本生物学会誌 第25号を送って頂き どうもありがとうございました。

ところで私は昨年春に引越しをし、住所変更のお知らせのはがきを奥野さんにも出しました。前号は旧住所のラベルの上に赤字で新住所に訂正したものが届いたのですが、今号は旧住所が無修正で前の下宿に届きました。

以前、生物学会誌上で、東大生をバ倒して、「住所変更のとどけを出す奴も1人もおらんと思う」とありましたが、こんなことなら住所変更届を出しても出さなくても同じではないですか！いや出した分、手間と40円がムダです。(もちろん、私は東大生ではありませんでした。〇〇大△△研の学生でした。)

しかし私は長期間私の意志により100円会員(即ち無職のぶうたろう)を続けていますので、少しは申し訳なく思っており、もう一度住所変更を届けます。このはがきが届きましたら、即、会員名簿に新住所を記録して下さい。よろしくお願いします。

3局長：えらい怒ってますよ。どうします。

会 長：ちょっと名簿見てくれ。

3局長：(調べる)あれっ？ もう新住所に変わってますよ。

会 長：そうやろう。変更届がきたら、何をさしおいても台カードをさしかえることにしてるんや。

3局長：何ですか、台カードって？

会 長：帳面やったら台帳やろ。うちはカードシステムやから台カードや。

3局長：何だ、つまらない。だけど、それやったら、何でわざわざ旧住所あてに送ったんですか。

会 長：それはな、あてなをコピーしといて張って出すやろ。面倒やから5部ほどいっぺんにつくるんや。そっちの方まで変更が及はなんだという訳や。

3局長：出す時、台帳、じゃなかった台カードと照らし合わせないんですか。

会 長：それはやるけど、人間には見落しいうのがあやろ。

3局長：例外の次は見落してですか。でも、いくら台カード変えたって、かんじんのあて名変えなかったら、何にもならんやないですか。

会 長：それが違うんやなあ。あて名が違うたら返ってくるやろ。その時台帳と照らし合わせる。

3局長：台カードでしょう。

会 長：そやったな。どっちでもええやないか。その時変更届が出てたら改めて新住所へ送るんや。出てなかったら送らだけや。今回も、旧住所へ出して帰ってきて、送りなおしたのが2〜3人あったて。

3局長：そんな、威張ることでもないでしょう。それにしても、何でそんなややこしいことしてるんですか。もうちょっとうまくやれませんか。

会 長：何でか知らんけど、こうなってしもたんや。変えようと思わんでもないけど、いま組合で“合理化反対”言うとするしな。当分これで行くわ。

(その3)

奥野先生

今年はずっと過しやすい日が続いておりますが さすがに寒の季節、冬らしくなって参りました。お褒りなく御健勝の事と存じます。

また、学会誌をお送りいただき まことにありがとうございます。今年度会費を郵券にて同封申し上げます(身分に変更はございません)。

全編いつも楽しみかつ目を開かれる思いで拝読しております。筆者が何をおっしゃりたいかを考えつつ読むのは 相当しんどいと共に楽しい事であります。最近の方々はその楽しさを忘れておられるようで、出版者としても苦勞するところがございます。

ついてながら、私は辞典部というセクションに居りますため「生物学辞典大事典」をとくに興味深く拝見しておりますが、二、三気が付きました点を記させていただきます。

1 辞典(事典)は限られたスペースで必要な事項を記述しなければなりませんので、文を極力削り込んで、定義、生物であれば分類、分布、特徴 といったぐあいに記していく。

11 記述には 社会とか生産等々 多義的な生態・形態等々 生物学用語としても通ずる用語を多用する。

この2点により、はるかにもらもらしい記述になるかと存じますので お試しになってはいかがでしょうか。

御上京のりにはまたお目にかかりたく存じます。お立寄りいただければ幸いです。

寒中くれぐれも御自愛下さいませように。

〇〇書店 辞典部

3局長：これは相当な“旧人類”ですな。会長くらいの年齢の人ですか。

会 長：言い方に気を付けろよ。まるでオレが旧人類の代表みたいに聞えるやないか。

3局長：そうひがんでとるところが旧人類ですよ。そんなつもりで言ったんじゃないのに。

会 長：ウソつけ。そうに決まっとる。残念ながら、この人はもっと若い。君よりは年寄りやけどな。

3局長：それにしても、この人、生物学会や誇大辞典を誤解してはるのとちがいますか。誇大辞典をこんな書き方で書いたら、何も面白いことないやないですか。

会 長：(本だから「生態学辞典」をとり出す) ちょっとここ読んでみ。

3局長：えーと、「ゴリラ 現生大型類人猿の一属で、西アフリカ・中央アフリカに分布。完全な森林生活者で、低地林あるいは山地林にすむ。食性は植食性。比較的安定した単雄群を単位集団とし、集団の行動圏を完全に重複している」

会 長：「集団の行動圏は」やろ。

3局長：「を」となってますよ。

会 長：そんならミスプリやな。

3局長：へえー、辞典にもミスプリあるんですね。

会 長：ミスプリくらいあってもかまわんが、なかみが間違ってることが多いのは困るな。

3局長：間違 ってますか？

会 長：まあ、辞典に限らず本に書いてあることはたいてい間違いや思った方がええ。

3局長：会長が書いた本もそうですか。

会 長：あれは特にひどいな。自分で書いたからよう判る。

3局長：そんなの無責任ですよ。ど、僕が言うのも変ですけどね。

会 長：つまらんこと言うから、話が進まんやないか。これこの通り、この文章は、辞典の書き方の注意2点にびったしやろ。

3局長：そういえばそうですね。ふうん。分類、分布、特徴に、森林生活者とか植食性とか……

会 長：こういうふうに書いたら、いかにも辞典らしくなる、いうことや。

3局長：辞典を辞典らしく書いて、何が面白いんですか。

会 長：辞典らしく見せかけながら、およそ辞典らしくない事を書く、というのが、面白くする手段の1つやないか。

3局長：ああ、そういうことですが。でもこの手紙、なかなかそうは読めませんよ。そう思って読めば、たしかにそうですね。

会 長：それは、君がすでに彼の手にはっかがあってるといふ事や。旧人類の文体で、新人類の考えつかんような事を書いてるといふ訳や。君もちょっと勉強せなあかん。

3局長：どうせ僕はシロクハシロ屋になるんでから、そんなややこしい事、ご免です。

会 長：君でこれやから、やっぱり出版社は苦勞するなあ。

(その4)

前 略

学会員の皆様、お元気でしょうか。3局長はすこぶる元気であります。シドニーは日本人だらけで、特に新婚の団体が多くて不気味です。いよいよこれから、グレート・バリヤー・リーフへと向かいます。金がかかるので、そんなには潜れないでしょうけど、できるだけ長い間いるつもりです。それでは皆様によろしく。 草々

3局長

<3月中に26号を出して、もう一度「編集後記」を書かしてやるから、覚悟しとけ — 会長>

< 編 集 局 だ よ り >

(会長と編集局長補佐との会話)

補 佐：こんにちわ。

会 長：長いこと顔見んかったけど、どないしてたんや。まあ、コーヒーでも飲め。<毎回この出だしては、しょっちゅうコーヒー飲んでると誤解されるやないか — 会長。誤解じゃなく正解じゃないですか — 補佐>

補 佐：あ、いただきます。ここんとこしばらく忙しくてね。

会 長：君が忙しいなんて、地球最後の日も近いんとちゃうか。

補 佐：それはオーバーですよ。実は、会長のやってる石油文明破壊活動<本誌19号649ページ>に遅ればせながら参加したいと思ひましてね、自動車学校に行ってたんです。

会 長：それは仲々ええ心がけや。<何が“ええ心がけ”や。北陸自動車道で車5台追越した、いうて、口をきわめて非難した(20号716ページ)くせに、というのが会長の本心 — 会長> 人間にとって致命的なこの石油文明を根絶するには、石油をどんどん使って無くしてしまふより方法はない。それに、オレが生きてるうちにはまず無くならんやろから、オレには好都合やしな。

補 佐：えっ、それじゃ会長は、単に個人的な都合でやってるんですか。

会 長：いや、何、個人的にも都合がええ、いうことや。孫に車で会いに行けんようになったら生きがいが無うなってまうやないか。<人に勝手な発言させるな。孫が苦勞せんでもええように、苦勞して石油使ってるんやないか — 会長>

補 佐：だれでも生きがいを持つ事は良い事ですからね。それに、石油文明を破壊して人類を救

うためには、他人が排ガスを吸うのも仕方ありませんね。歩行者も時々はねられてますけどそれも仕方ありませんね。

会長：昔な、絶対に人をはねん安全な車ちゅうのを考えたことがあるんや。それはな、人にぶつかったら車の方がバラバラになるという車や。仲々ええアイデアやと思うんやけど、どの自動車会社も買いにきよらんや。

補佐：そんな車、買う人いませんよ。会長なら買うんですか。

会長：売ってないもん、買えんやないか。それで、我慢してターセルに乗ってるんや。

補佐：我慢してるようには、とうてい見えませんけどね。それはともかく、自動車学校で恐い事おそわりましたよ。一番恐かったのは、進路変更の時、後を振り向いて安全確認するというやつですね。スピードが出てる時でも対向車が近い時でも、そうしないと怒られるんです。そんな事、実際はだれもしないでしょう。会長はしてますか。

会長：そんな危ない事、せえへん。あの規則も var. todaisotsu <本号“誇大事典”参照> が作ったという事、君は知らんのか。

補佐：やはりそうだったんですか。それで納得しましたよ。

会長：彼らはな、一見合理的でいて、実はだれも守りっこない規則をたくさん作るんや。それを警官に見つけさして罰金をとるんや。つまり、有無を言わず一般市民から金を巻き上げる方法やな。取られる方には、違反したという負い目があるから、あんまり強く文句いわれへんしな。

補佐：それじゃまるで、詐欺と同じじゃないですか。

会長：合法的な詐欺と言うやつや。規則を作る側の人間になったら、何とでも出来る。何せ彼らは、小さい時から受験競争で鍛えられて、そこで成功した奴等の集団やからな、そんな規則作るのなんか得意中の得意や。ところで、もう免許、取れたんか。

補佐：ええ、取れましたよ。結構自動車学校の先生をヒヤッとさせましたけどね。

会長：ヒヤッとさせる位はだれてもやる。路上教習で、“ここは50 km やから飛ばせ” いうからアクセル踏んだら、先生それから恐がってな、“ブレーキ踏め” としが言わんようになった。まあ、子供も独立したし、この世にせんならん仕事はあんまり残ってへんのや、てなこと言うとなさかいな。

補佐：そら恐がるわ。まだ若い先生でしょう。

会長：うん、うちはまだ子供小さいから、死ぬわけたいかん、言うとなんや。それはええけど早く車買うて活動に参加せえよ。

補佐：ところが、それが仲々御期待にぞえないんです。

会長：なんでや。

補 佐：石油文明を破壊しようと思ったら、ずい分金がかかるもんですわ。何せ助手の給料安いもんですから。もうちょっと待って下さい。金が出来たら参加させていただきます。

会 長：当分助教授にはなれそうにないし、しゃあないな。こっちは岐阜やら京都やら和歌山やら <岐阜にはもうおらんし、京都と違て大津やでー 会長>走り回って、ものすごいこと活動しとるのに、君にはあんまり期待でけん。車買えてもガソリン代が結構かかるしな。

補 佐：出来るだけ期待に応えられるよう、がんばります。でも、一つ心配な事がありましてね。

会 長：何や。

補 佐：もしうちの教授が道を歩いでるのを見たとするでしょう。そうすると無意識のうちに、そっちの方向に急ハンドルを切ってアクセルを思い切り踏むんじゃないか、と恐いんですよ。何しろ無意識のうちですからね。どうしたらいいですかね、そんな時。

会 長：そりゃ、たとえ本当に無意識でやったとしても、単なる事故とは見てくれんやろね。まあ仮りに殺人罪はまぬかれたとしても、クビにはなるな。クビになったら大変やで。まず雇ってくれるところはないし、雇ってくれてもおそらく動まらんし。何せ日本一茶な助手やもん。

補 佐：自分でもそう思うから、実は心配してるんです。

会 長：そうや、教授や思たら、パッと目をつむるんやな。見えなんたらそんなごとせんやろ。

補 佐：目をつむったまま車を走らせるんですか。そんな無茶な。

会 長：そうかて、クビになるか、めくら運転するか、二つに一つやで。

補 佐：そうですね、目をあけていたら確実にひき殺しますけど、目をつむったら無事に済む可能性がまだ残ってますからね。

会 長：教授ならまだええけど、一般の人を巻きとえにしたらいかん。やっぱりクビを覚悟して目はあけとくこっちな。

補 佐：ところでこの間、ある人にこっそり教えてもらって初めて知ったんですけど、今走ってる車はみんな、会長の指令を受けて、石油文明破壊 活動をしているんだそうですね。

会 長：何年もここに入入りしとって、そんな事も知らんかったんか。

補 佐：ひょっとしたら、ホルムズ海峡で攻撃されたタンカーも……………

会 長：しーっ、大きな声で言うな。世の中には君の知らん色んな事があるんや。それにしても君みたいに無知では、日本生物学会でも局長への昇進は無理やな、ま、万年補佐がええとこやろ。

補 佐：やっぱり日本生物学会でも出世はダメですか。あっ、もうこんな時間だ。それじゃ、会長でさえ怖い F 先生が待ってますんで。

会 長：そら大変や。早よ行かんと、車に乗る前に命がなくなるで。

< 編集、してないけど、後記 >

第3編集局長 <お前、まだおったんか - 会長>

何でも、3月中に学会誌を出すのだそうだ。ろくに原稿も集まっていないのに出そうとするから、後記を書くはめに落ちいるのだ。<「魚陸に上る」を短くしてスペースとってやったんやないか - 会長> ここが編集局長のつらいところである、などとはだれも信じてくれまい。私自身、信じていないのだ。<君が信じていても、他人は信じてくれるかどうかわかんよ>

最初に<最初じゃないじゃないか>連絡事項を1つ。

2局長に続いて、3局長も無事“学業”を終えて<学業にクオテーションを付けたところなど、大分わかってきたようだね>社会へ旅立つことになった。したがって、当然の事のように第4編集局長が決ったのだ。詳しいいきさつは知らないが、<無責任!> どうせ「君、4局長やれ」の鶴の一声で決まったに違いない。世間では、会長というと鶴のひと声と決っているようだが、<“ピップ・エレキバン!”というひと声もあるよ - 2局長> 当学会の会長は、どう見ても鶴には見えないのが難点である。<ボクもそう思う。どう見ても〇〇〇〇だね - 2局長>

まあ、それはどうでもいい。<どうでもいい事、書くな - 会長。そんなら書かす事ないじゃないですか - 3局長>

とにかく4局長が決って、3局長は無罪放免（仮釈放という人もいるが）となって、世間に紛れ込んで行方をくらましてしまうつもりである。が、当学会の追及は厳しく、だれとは言わない（言えない、が本当）が、地の果てまで現れそうで恐い。<外国へ亡命したら追っかけて行かないよ。“日本”生物学会だもんね - 会長> 4局長決定の際に、会長と4局長との間に何らかの取引があった、などという事は口が裂けても言わない。第一、口が裂けたら痛くてたまらないし、物が食えなくなってしまうかもしれない。それだけは絶対にいやである。教授に見放され、何とかさんには説教され、<この“何とかさん”は私ではない。念のため - 会長><ああ、フケさんのことでしょ - 3局長> ホロホロになりながらも<その割りにしては、ごきげんな顔して遊んでるな - 会長> 決して萎なうことがなかったのは、食べ物に対する執着である。プライドは簡単に失ってしまったが、<あったんか? - 会長> 食べ物をそう易々と決ってしまうわけにはいかない。<「魚陸に上る」23号84.5ページに登場する、「やせたソクラテスより太ったブタになりたい」と言った学生は、何をかくそう、3局長なのです - 会長>

話がそれてしまった。

4局長は、3局長と違って筋金入りである。自分で言っていて意味が良く判らないが、今後は4局長の活躍に期待してもらいたい。<勝手な事言うな! 編集局長が活躍なんかでけんこと、よう知ってるくせに - 4局長>

さて、連絡は終ったし、もうそろそろ誌面も埋るのではないだろうか？ え、まだ？ ではムダ話を続けよう。<だれだ、こんな奴に原稿書かした奴は！ — 会長> 読む人のことなど気にせずに書けばよい、という投稿規定に従おうではないか。私は本質的に従順なのだ。

会長がどこかで「編集後記の投稿が多くて出番がない」と嘆いているが、少なくして会長の出番を増しても私は一向に構わないよ。何だったら全部会長が書いてもいいですよ。<ホンマに書いたらか。年3冊で赤字になるから、本気で書き出したら会費値上げせんならんで — 会長> 編集局長が、ろくに原稿に目を通さないのを知っているもんだから、<直接タイプしてるから、

“原稿”見ようと怠たら頭開けんならんよ — 会長> 好き放題書いてるんだから。あ、そうか、好き放題書いていいんだっけ。<会長といえども、好き放題ぶりでは3局長に一目置くね — 会長> まあ、いいや。しかし、たまに原稿を見ると結構発見があって面白い。いつだったか忘れたけど、編集後記で、会長と3局長が共に多忙で何たら、と書いて、えーと、25号のどこかです。<942ページだよ> そこで、何で忙しかったかは 本当に忙しかった人に気の毒だから書かない、と書いたら会長は、オレは違う、みたいなコメントを入れたけど、確かに3局長とは違う。何と会長は温泉めぐりに忙しかったのだ。知ってたけど。それも“常に”忙しいのだと自分で言っている（書いている）のだ。3局長も遊び回っていて“常に”忙しいけど、温泉めぐりはしてないから、会長とは違うのは本当である。<よく読んでみる。「空いた時間はすべて温泉へ行ってのんびりすることにしてるから、私は常に忙しいのである」本号949ページ。ただ単に「遊び回って忙しい」のとは本質的に違うのだ — 会長><同なじようなもんやないですか — 3局長> と書いている最中に、平局長が何だかんだ言ってきたので、何を書いたか忘れてしまった。<「何を書いたか」なら読み返したらわかるやろ。「何を書こうとしてたか」なら忘れることもあるがね — 会長> もう、どうでもいいやあ。

今度は書評のことでひと言、いや、もっと長いかも。とうとう書評を送ってきた人が現われたじゃないですか。先号の呼びかけも、ムダじゃなかったみたいですね。たぶん、本当はあれと無関係ではあるのだが。<当り前や。書名も出版社名も書かずに書評を募集したって、だれも書くか。> 前号で、書評は本を読まなくても書ける、と受け取られるような言い回しを使ったせいかどうかは知らないが、先日、某教官にある論文についてのレポートを提出させられた時、<提出させたわけじゃないよ。出さなければ卒業できなくなって、君が困るだけで、僕はちっとも困らない。「提出させてもらった時」と書くべきじゃないのかね — 某教官><ボクが卒業できなくなってまた留年したら、先生ホントに困りませんか？ — 3局長><うん、それも言えるな — 会長> その先生は私のレポートを見て、「これは、読んでいなくても書けるなあ」とのたまわったそう。この場ではっきり言っておくけど、<公けの誌面を私事に使うな — 会長>、一応読みました。もちろん証拠はなく、自分でも、あのレポートは論文を読まなくても書けるな、と

思っております、ハイ。実験をしなくても論文が書けるご時勢、論文読まずともレポートは書けるんじゃないですか、実際。私は“背信の学生”なのだ。＜論文読まずにレポートを書くなどという芸当は、たとえば奥野先生みたいな海千山千の学者になって初めてできることで、貴方みたいなかけ出しの学生のやることじゃないわよ — 冨家＞<ちょっと待て。それでは私が、調査もせずに論文書いてるように聞えるやないか — 会長＞<あれ？ そうじゃなかったんですか — 3局長＞

※ 途中でですが、ここで注をひとつ。3局長はこの原稿を書きながら、「背信の科学者たち」という本を読んでおりました。アメリカのジャーナリストが書いた本で、科学者が出世のためにいかにデータを偽造するかという実例をたくさん集めています。それをもじって、“背信の学生”などと言っておるのです。だれにもわからんようなこと、説明抜きで書くな！ 学界で出世するためのノウ・ハウを真面目に書いた「サイエンティスト ゲーム — 成功への道」という、正反対の面白い本もあり、次号で特乗します。乞御期待。（会長）＜“乞御期待”と書いて、御期待に沿ったこと一度もないやないですか — 2局長＞<まあそういうな。当方にもいろいろ都合があつてな — 会長＞

また話がそれた。

いや、しかし、長い間会長の世話になってます、ホント。会長は筋違いの師匠で、ウチの教授は見当違い。感謝してます。齒の浮くような誉評は受けないけど、心にもないようなお世辞ぐらいは言っときましょう。＜オレは“唯物論者”やから、お世辞よりモノの方がええ — 会長＞

こらで話題をかえたいけど、もう残りのページも埋まるでしょう。<ちょうどよいところや。あと半ページしかない> 来年度から千円会員になってしまうから、もっと学会誌を出して下さい。百円会員の時は得したような気がしてたんだけど …… あ、こんな事言うと、君が原稿をたくさん集めればエエ、<そうや、君は永久3局長やもんな> とか言われるから、やっぱり、いいです。これからもその調子で適当にやってください。ああ、オレって無責任だなあ。と感心したとこで、おしまい。

<長らく大学に居すわって、第3編集局を勝手につくり、落ちこぼれのくせにいちばん大きな顔をして騒いでいた3人組も、ようやく出ていくことになりました。これで編集局を静けさを取りもとし、“編集局だより”も正常化し、生物学会誌の誌面はもっと真面目な“論文”で埋まることになるでしょう。会員みなさんと共に喜びたいと思います。ただ、今のところ2～3人、落ちこぼれそうな学生がいて、それがちょっと気がかりです。本当の落ちこぼれにならぬよう、ただ今懸命に指導中なのですが — 会長＞<会長が“指導”するから落ちこぼれるんじゃないですか — 3局長＞

日本生物学会誌 第26号 1988年3月31日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載